

し せき むか さ じょう あと
史 跡 穂 佐 城 跡 II

穂佐城跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2016

宮 崎 市 教 育 委 員 会

し せき むか さ じょう あと
史 跡 穂 佐 城 跡 II

穆佐城跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

宮 崎 市 教 育 委 員 会

序

宮崎市高岡町に所在する穆佐城^{むかさじょう}は、南九州を代表する中世の大型山城のひとつです。その歴史は古く、南北朝時代の初期、建武3(1336)年には文献史料にその名が登場します。その後約300年間、城郭として存在し続け、特に南北朝・室町の時代には南九州における中世動乱の、まさに中心的な舞台でした。

歴代の城主には南九州制圧のために足利尊氏が派遣した畠山直頼や、のちに本宗家の当主となる島津久豊など魅力的な人物がおり、穆佐城の歴史には様々なドラマが秘められています。

遺跡としての保存状態も極めて良好で、南九州特有の巨大な空堀やそびえ立つ土星、数十に及ぶ曲輪など、大型山城の構造を自分の足で確認し、理解することができます。東西550mもの範囲に及ぶ広大な城内を歩くと、戦いの場として、あるいは統治の場として、土を削り、盛り上げて自然の山を巧みに改変し、城に作り変えた当時の人々の息遣いが聞こえてくるような気がいたします。

穆佐城は上記歴史的な重要性と遺存状態の良好なことから平成14年に国指定史跡となり、現在宮崎市で整備事業を進めておりますが、これは改めて言うまでもなく、何世代にも及ぶ地域の方々の文化財保護に対する理解と努力の上に成り立っています。今後、穆佐城を我が国の歴史を語り、理解する上での重要な一要素として保護、啓発していくことはもちろんですが、地域の皆さまの誇りともなるような整備を目指して、一層努力して参りたいと思います。

最後になりましたが、宮崎市城跡整備専門委員会の諸先生方をはじめ関係諸機関の皆さま、寒風の中作業に従事された発掘作業員の皆さま、根気強く出土遺物の資料化をしてくださった整理作業員の皆さんに厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

宮崎市教育委員会
教育長 二見俊一

例　　言

1. 本書は保存整備事業により平成 25・26 年度に発掘調査を実施した国指定史跡穆佐城跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は平成 25 年 10 月 1 日～26 年 1 月 31 日(25 年度)、平成 26 年 12 月 2 日～27 年 3 月 14 日(26 年度)の期間実施した。また整理作業は平成 26 年 2 月 3 日～3 月 14 日(25 年度)、平成 27 年 2 月 23 日～3 月 24 日(26 年度)および平成 27 年 5 月 11 日～6 月 10 日(27 年度)の期間実施した。
3. 整備専門委員会の構成および整備指導は以下のとおりである。

宮崎市城跡保存整備専門委員会

整備指導

委員長 谷口 義信(宮崎大学名誉教授)

文化庁記念物課

委員 伊藤 哲(宮崎大学農学部生物環境科教授)

宮崎県教育庁文化財課

包清 博之(九州大学大学院芸術工学研究院教授)

千田 嘉博(奈良大学学長)

三木 靖(鹿児島国際大学名誉教授)

八巻 孝夫(中世城郭研究会)

横田 漢(宮崎大学国際連携センター特任教授)

4. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 宮崎市教育委員会

※平成 25・26 年度：調査および整理、平成 27 年度：整理および本書作成

文化財課 課長 橋口 一也(平成 25・26 年度)

" 日高 貞幸(平成 27 年度)

埋蔵文化財係 副主幹兼係長 島田 正浩(平成 25・26 年度)

係長 井田 篤(平成 27 年度)

整備担当 主事 後藤 純二(平成 25 年度)

主査 今城 正広(平成 26 年度)

主任主事 東元 慎吾(平成 27 年度)

事務 主事 芝 優美(平成 25・26 年度)

" 武富 知子(平成 27 年度)

調査・整理担当 主任技師 竹中 克繁(平成 25～27 年度)

嘱託 川野 誠也(平成 25・26 年度)

" 永友加奈子(平成 25 年度)

" 小牟田智子(平成 26・27 年度)

5. 掲載した遺構図面の実測は竹中・川野が、遺物図面の実測は竹中・永友・小牟田および整理作業員がおこない、製図は竹中・小牟田がおこなった。また現場および遺物の写真撮影は竹中がおこなった。
6. 自然科学分析は株式会社 古環境研究所に委託し、その成果品から一部を抜粋し第 2 章 第 4 節に掲載した。
7. 本書の執筆(第 2 章 第 4 節のぞく)・編集は竹中がおこなった。また本書作成にあたって黒木宏多(宮崎市文化財課)の助力をえた。
8. 本書で使用する方位記号は全て真北を指す。
9. 本書に掲載している出土遺物および図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 はじめに	
第1節 穂佐城跡の地理的・歴史的環境	1
第2節 穂佐城の歴史	1
第3節 穂佐城跡保存整備事業の概要	4
第2章 調査成果	
第1節 平成25・26年度調査の概要	5
第2節 平成25年度の調査	
第1項 曲輪7平坦面西端	5
第2項 曲輪7土壘上	10
第3項 曲輪7・8間斜面	11
第3節 平成26年度の調査	
第1項 曲輪7出入口(虎口)	17
第2項 曲輪7東端の堀	17
第4節 自然科学分析(抜粋)	27
第3章まとめ	35
第12図 25-7E平面図・土層図 および出土遺物実測図	15
第13図 25-7F平面図・土層図・土坑30実測 図および25-7F出土遺物実測図	16
第14図 26-7A平面図・土層図	18
第15図 26-7A出土遺物実測図	19
第16図 26-7B・C平面図・土層図 ・出土遺物実測図	20
第17図 26-7D平面図・土層図	21
第18図 26-7D出土遺物実測図①	22
第19図 26-7D出土遺物実測図②	23
第20図 26-7D出土遺物実測図③	24
第21図 26-7D出土遺物実測図④	25
第22図 サブトレ4平面図・土層図 および出土遺物実測図	25
第23図 26-7E・F平面図・土層図 および出土遺物実測図	25
第24図 その他の出土遺物実測図	26
第25図 土坑2における植物珪酸体分析結果	28
第26図 土坑28における植物珪酸体分析結果	28

挿図目次

第1図 穂佐城位置図	2
第2図 穂佐城跡周辺遺跡位置図	2
第3図 穂佐城縄張図	3
第4図 調査箇所位置図	6
第5図 調査区配置図	7
第6図 25-7A平面図・土層図	8
第7図 土坑28・土坑29実測図	9
第8図 25-7A出土遺物実測図	10
第9図 25-7B・C平面図・土層図	11
第10図 25-7D平面図・土層図	12
第11図 25-7D出土遺物実測図	13

表目次

表1 植物珪酸体分析結果	28
表2 花粉分析結果	28
表3 出土土器・陶磁器観察表①	30
表4 出土土器・陶磁器観察表②	31
表5 出土土器・陶磁器観察表③	32
表6 出土土器・陶磁器観察表④	33
表7 出土土製品観察表	34
表8 出土金属製品観察表	34
表9 出土石製品観察表	34

図版目次

図版1	25-7A、25-7A土坑28と土坑2、 25-7B、25-7D	37
図版2	25-7D・E・F、25-7E、25-7F、 25-7F曲輪7部分、25-7F曲輪8部分	38
図版3	26-7D、26-7A、26-7D堆積土4掘り 下げ状況、26-7E・F	39
図版4	25-7A・25-7E出土遺物、 25-7D出土遺物	40
図版5	25-7F出土遺物、 26-7A・その他の出土遺物	41
図版6	26-7B・26-7C出土遺物、 26-7D出土遺物①	42
図版7	26-7D出土遺物②、26-7D出土遺物③	43
図版8	26-7D出土遺物④、サブトレ4 ・26-7E・26-7F出土遺物	44

第1章 はじめに

第1節 穂佐城跡の地理的・歴史的環境

穂佐城跡は宮崎市高岡町小山田に所在する。現在の宮崎市街地は宮崎平野の南部にあたるが、穂佐城はこの平野部と内陸丘陵地帯との境に立地し、東西に伸びる標高60mほどの丘陵の東端に占地している。城跡の北7.5kmの位置には内陸の都城盆地から平野部を経て日向灘へと流れ込む県下最大の河川大淀川が東流している。

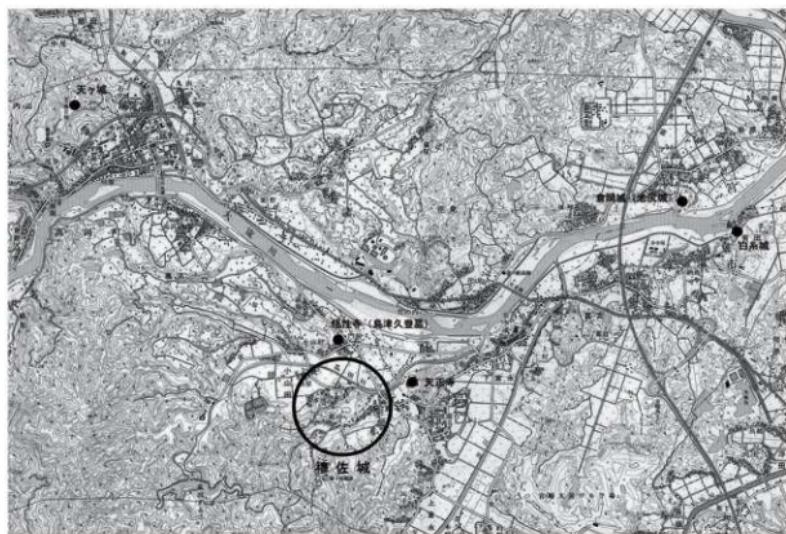
穂佐城跡の周辺では、北西に位置する高浜丘陵上の旧石器・縄文時代の永迫第1・2遺跡をはじめ、弥生時代の土坑墓が検出された的野遺跡、7世紀代の建物12軒以上が検出された八兒遺跡等、全時代を通じての遺跡の所在が確認されている。

第2節 穂佐城の歴史

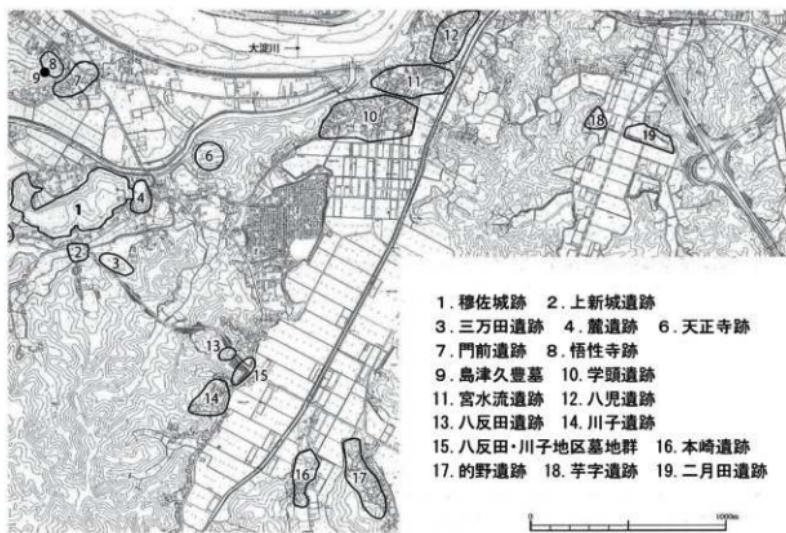
室町幕府による日向国支配の拠点【南北朝時代】 穂佐城の史料における初出は、南北朝初期の国人同士の抗争にともなうものである。建武2(1335)年12月、穆佐院政所を占拠した南朝方伊東祐広(木脇伊東氏庶流)を北朝方土持宣栄(大塚土持氏)が追い落とし、翌建武3(1336)年1月、攻め寄せた南朝方肝付兼重を「穆佐城」で防戦したことが「土持宣栄軍忠状」に確認できる。同年、足利尊氏により国大将として日向国に派遣された畠山直顕は穆佐城を拠点とし、以後、貞和元(1345)年までに国内の南朝方を制圧して守護となり、大隅にまで影響を持つようになった。観応の擾乱時に直顕は一時足利直冬方となり、その後尊氏方に復帰するが、次第に薩摩の島津氏や肥後の菊池武光に押され、延文2(1357)年前後、穆佐城より撤退した。

その後数十年間の穆佐城の趨勢は明確ではない。ただし『日向記』に応永2(1395)年の九州探題今川了俊の探題職解任に続き、翌応永3(1396)年、国大将今川播磨守(了俊の子ないし孫)が穆佐城から撤退したとの記事が見えることから、この間も穆佐城は日向国における室町幕府の拠点としてあり続けていたものと思われる。

伊東・島津抗争の舞台【室町時代前半】 国大将今川氏の穆佐城撤退を受け、鹿児島の島津元久が宮崎平野南部への進出を開始する。応永6(1399)年、元久は伊集院久氏を穆佐城におくが、間もなく久氏にかわって元久の異母弟久豊が穆佐城主となり、池尻(倉岡)、白糸(富吉)、細江に支城をおいた。しかし久豊は元久に無断で伊東本宗家の祐安と講和を結び、その娘との間に嫡男虎寿丸が穆佐城内の坪之城(曲輪名)にて誕生した。応永18(1411)年、元久の葬儀に際して久豊は穆佐城から鹿児島に急行し、元久養子の初大千代丸(伊集院氏)から位牌を奪って強引に島津本宗家の家督を継承したが、その後約10年間、伊集院氏をはじめとする反久豊方と鹿児島全域に及ぶ内乱状態となった。この間、内乱鎮定に奔走する久豊の隙をつき、応永19(1412)年、伊東祐立が大淀川以南に進出し穆佐城は落城する。『山田聖栄自記』にはこの時「(穆佐城の)西城も焼払候得共」との記事が見える。応永30・31(1423・1424)年、鹿児島での内乱をおさめた久豊は大淀川以南の地の奪回を目指し、伊東方の加江田城に攻め寄せるが、同じく『山田聖栄

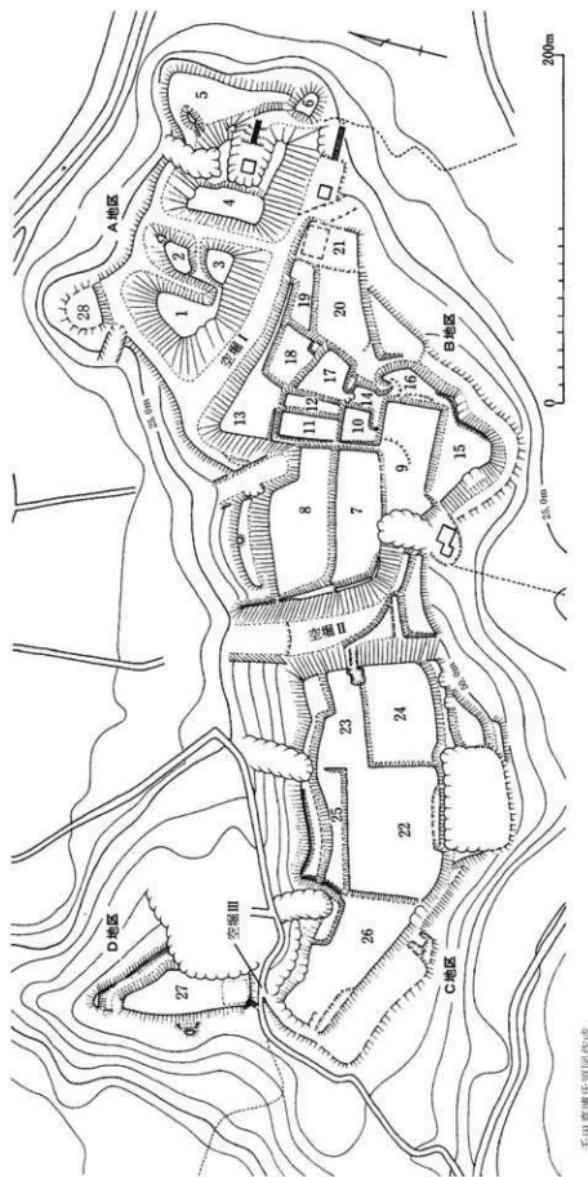


第1図 穀佐城位置図 (Scale=1/50,000) ※国土地理院 1/25,000「日向本庄」使用



第2図 穀佐城跡周辺遺跡位置図 (Scale=1/25,000) ※宮崎市教委編2013年より転載

第3図 穂佐城細張図 (Scale=1/2,800) 条高間町牧委局1992年上り軒地、一部改用



千田善博氏原図作成

自記』には、この時講和を望む伊東方にに対して久豊は「先日穆佐ニ而恥をかかせられ候事共生々世々無念之至候」と言い、加江田城を攻め落としたことが書かれている。その後、久豊の跡を継いだ忠国（虎寿丸）も複数回進攻し、永享6（1434）年までに穆佐城の回復に成功したようである。

伊東氏時代【室町時代後半～戦国時代中葉】 文安2（1445）年、伊東氏中興の祖と呼ばれる祐堯が穆佐城を攻略して落合治部少輔を地頭（城主）とし、その後約130年間、穆佐城は伊東氏の領有となる。伊東氏の領有時代に関しては史料が少なく、前後の島津氏時代に比して詳細が明確ではないが、天文9（1540）年、穆佐城主長倉上総介が弟の長嶺地頭能登守とともに反乱を起こし、伊東義祐により鎮圧されている（長倉能登守の乱）。

島津氏時代【戦国時代後葉～江戸時代】 天正5（1577）年の都於郡崩れ・伊東氏の豊後落ちにより日向国のほぼ全城が島津氏の支配下となり、穆佐城には地頭が配置された。この頃の穆佐地頭については、天正6（1578）年～文禄3（1594）年が樺山忠助（および規久か）、文禄3（1594）年～慶長4（1599）年が平田増宗、慶長4（1599）年～元和6（1620）年が川田国鏡と明確な史料が残る。特に穆佐地頭樺山氏は「上井覚兼日記」にも複数の記事が散見される。

慶長5（1600）年の閑ヶ原合戦に関連した「稻津騒動」時には、東軍方についた伊東氏が西軍方の島津氏領である穆佐城に攻め寄せたが、地頭川田国鏡により撃退されている。

その後、元和元（1615）年の一国一城令により穆佐城は廃城になったものと思われる。

第3節 穆佐城跡保存整備事業の概要

旧高岡町において都市公園化の計画を受けて平成2年度に縄張図作成（千田嘉博氏）および平成2～9年度に6次にわたる確認調査を実施した。平成4年度頃には史跡公園化の構想を持ち上がり、平成9年2月に保存整備基本計画策定、続く平成10年4月に町指定史跡となった。平成10～13年度に国指定史跡予定地用地取得をおこない、平成14年3月に「九州地方の中世史を語る上で重要、遺存状態が極めて良好」との指定理由により国指定史跡となった。平成14年度に史跡指定地用地取得をおこない、平成15年度より整備事業にともなう発掘調査を開始した。平成16年3月に保存整備基本計画（改訂版）を策定、平成18年1月の宮崎市との合併を経て、平成21年度に立木管理計画書策定、同21年度より立木管理工事を開始した。

【引用・参考文献】

- 高岡町教育委員会編 1992年『高岡町遺跡詳細分布調査報告書』高岡町埋蔵文化財調査報告書第2集 高岡町教育委員会
- 高岡町教育委員会編 2004年『穆佐城跡保存整備基本計画』高岡町
- 新名一仁 2014年『日向国山東河南の攻防 室町時代の伊東氏と島津氏』みやざき文庫101 鈴彌社
- 都城市史編さん委員会編 2005年『都城市史 通史編 中世・近世』都城市
- 宮崎県編 2002年『宮崎県史叢書 日向記』宮崎県
- 宮崎市教育委員会編 2013年『史跡 穆佐城跡 I』宮崎市文化財調査報告書第94集 宮崎市教育委員会

第2章 調査成果

第1節 平成25・26年度調査の概要

B地区の最高所に位置する曲輪7および現況約3mの比高差をもってその北に隣接する曲輪8は穆佐城の主郭と考えられ、平成20～23年度の4ヶ年度、総面積1,972m²における発掘調査を実施し、平成24年度に調査報告書『史跡 穆佐城跡I』を刊行した（宮崎市教委編2013年）。

平成25・26年度はその補足調査として、曲輪7・8において前調査（※上述の『史跡 穆佐城跡I』報告の平成20～23年度調査。以下同）時検出遺構の自然科学分析や調査区の拡張、未調査箇所の調査等を実施した。

平成25年度は曲輪7平坦面西端における調査区の拡張と土坑の自然科学分析（25-7A※調査区名。以下同）、曲輪7西端の土壘上（25-7B・25-7C）、曲輪7と8の間の斜面（25-7D・25-7E・25-7F）の調査を実施した。調査面積は25-7A:84.5m²、25-7B:8.3m²、25-7C:15.9m²、25-7D:32.2m²、25-7E:16.7m²、25-7F:18.7m²の計176.3m²である。

平成26年度は曲輪7南東端で検出された出入口（虎口）部分の調査区拡張（26-7A）と、これに接続する南北方向の堀部分の調査区拡張（26-7B・26-7C・26-7D・26-7E・26-7F）をおこなった。調査面積は26-7A:60.9m²、26-7B:5.2m²、26-7C:9.2m²、26-7D:8.2m²、26-7E:1.9m²、26-7F:2.0m²、サブトレ4:2.5m²の計89.9m²である。

以下、調査区毎に詳述する。なお、今回調査によって検出された遺構には、前調査時検出遺構からの継きで遺構番号を付している。

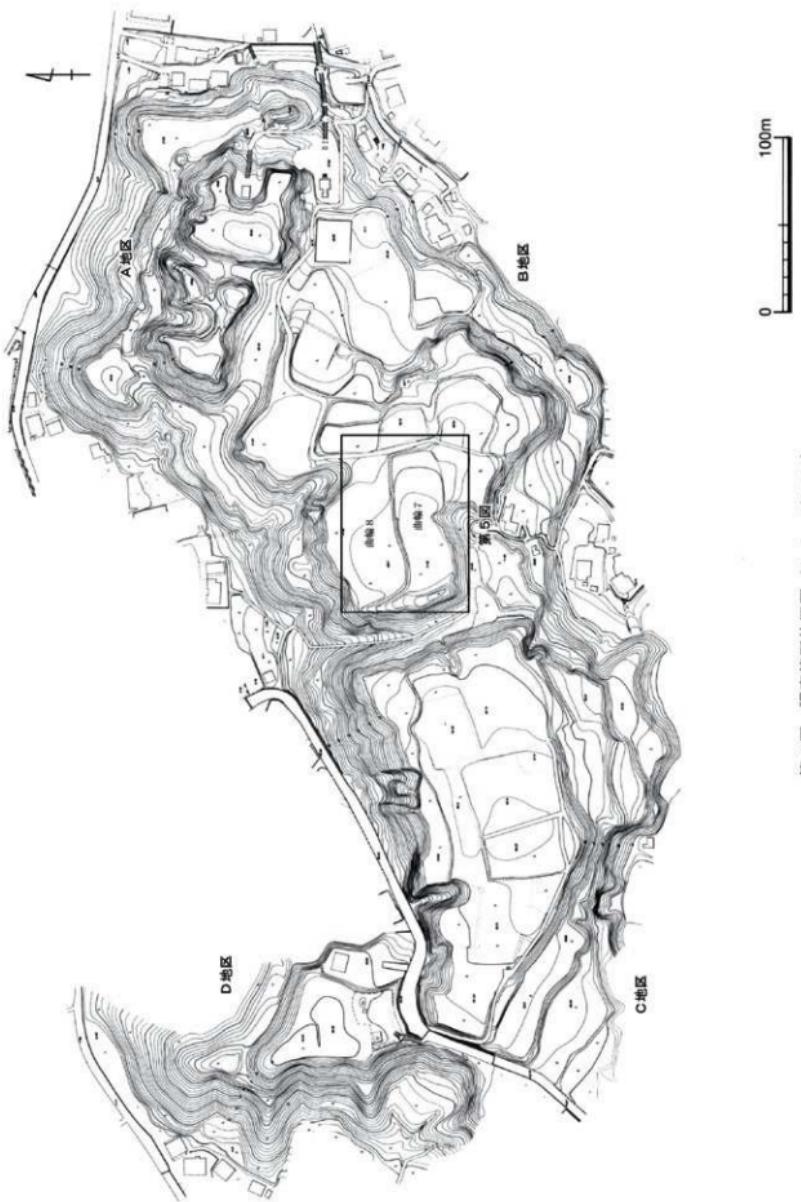
第2節 平成25年度の調査

第1項 曲輪7平坦面西端

25-7A（第6～8図） 前調査において検出された主となる建物と目される大型掘立柱建物の背面、土壘との間の最奥の空間であり、同じく前調査において検出された大型の土坑を含め「庭園」の可能性が考えられたため、前調査の調査区の復旧および拡張という形で調査をおこなった。

土坑2（第6図）は前調査で検出された平面橢円形を呈する長軸5.4m、短軸3m、深さ0.9mの大型の土坑で、出土遺物から16世紀中葉に比定される（宮崎市教委編2013年pp.34-35）。性格不明であるが、枯山水の池の可能性も想定されることから、掘り下げ部分を復旧し、堆積土の自然科学分析をおこなった。分析の詳細は第4節に後述するが、イネが大量に検出された。イネの初穂も検出され、稻藁として入っていた可能性が高い。検出は堆積土下部に顕著であるが、上部でも一定量検出された。このことから当遺構は枯山水のものとして想定していた「空」の状態ではなく、稻藁を入れた状態で使用される実用的な土坑と考えられる。用途としては資材としての稻藁の貯蔵用や稻藁の保温性を利用した貯蔵穴、あるいは稻藁を燃料材とした狼煙用の土坑という可能性も考えられよう。

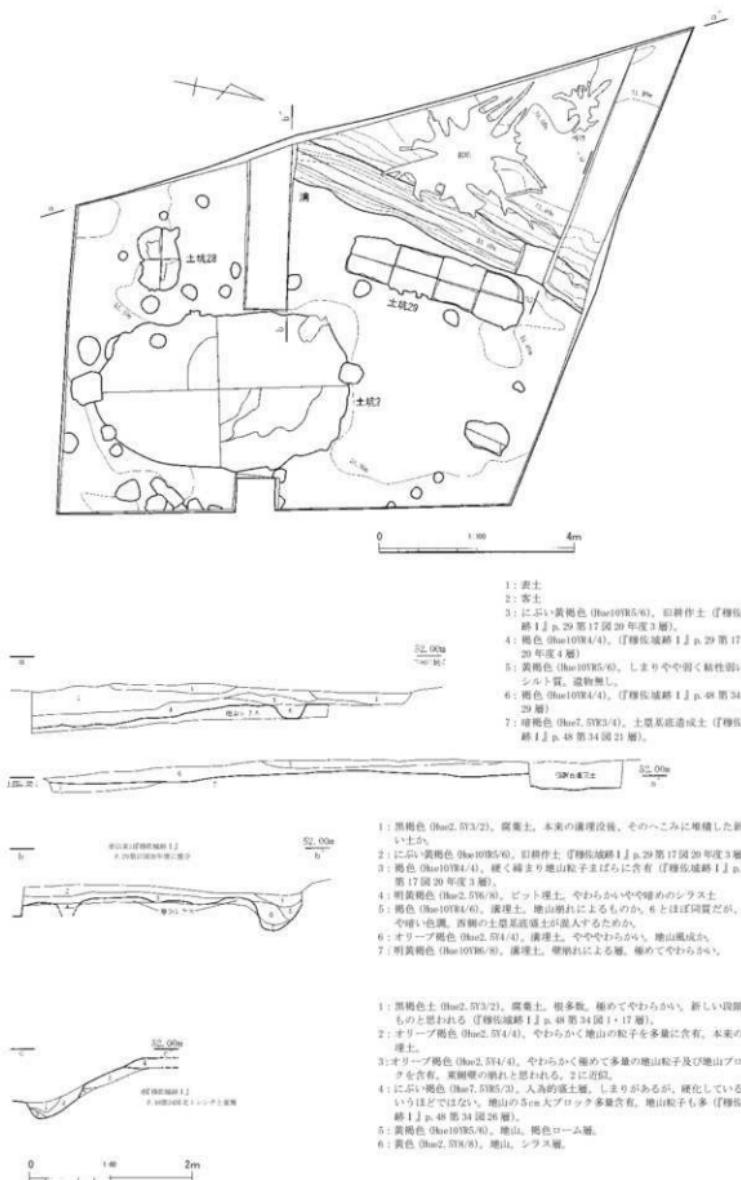
土坑28（第7図）は調査区南西端に検出された長軸1.3m、短軸0.8m、平面形は長方形に近い



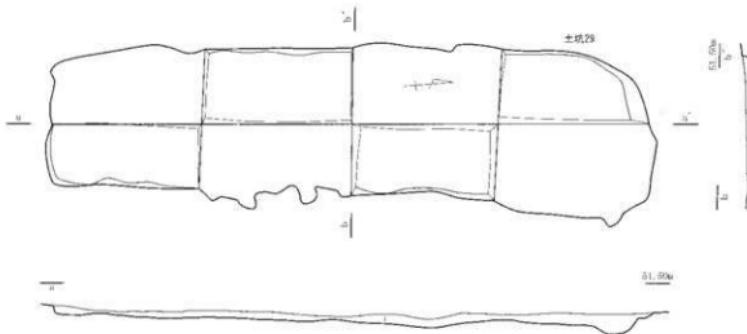
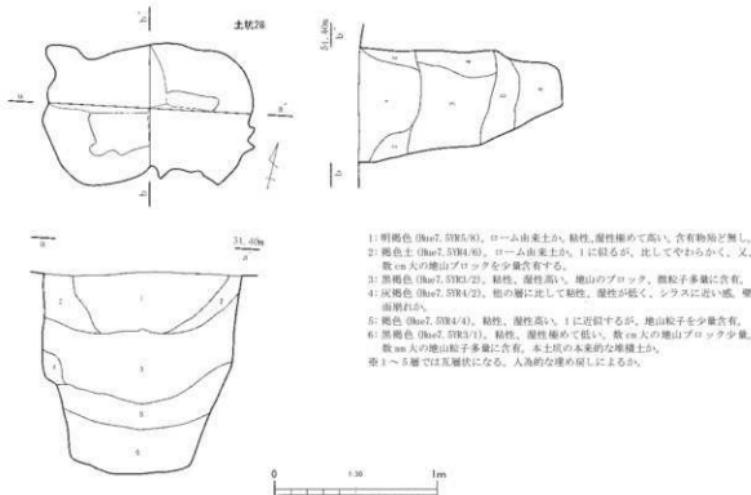
第4図 調査箇所位置図 (Scale=1/2,800)



第5図 調査区配置図 (Scale=1/400) 幸調子落としは平成20~23年度調査



第6図 25-7A 平面図 (Scale=1/100)・土層図 (Scale=1/60)



第7図 土坑28・土坑29実測図 (Scale=1/30)

土坑である。検出面からの深1.25mで壁面の立ち上がりは垂直に近く、平坦な底面を持つ。遺構内の堆積土は、厚数十cmでともに粘性・湿性の高い明るい褐色土(1・5層)と黒褐色土(3層)が互層になつており、人為的な埋め戻しが行なわれた印象を受ける。厚30cmほどの最下層(6層)は粘性・湿性低く上部の堆積土と様

相が異なり、土坑使用時の堆積土かと思われる。トイレ遺構の可能性を考え、最下層土の自然科学分析をおこなったが、保湿性の低いシラス土壤でもあり、寄生虫卵の検出等、明確な結果は得られなかった(第4節)。

土坑29(第7図)は調査区西半において検出された長軸3.7m、短軸0.85m、検出面からの深5cmほどの平面長方形状の遺構である。土坑とも溝とも判別し難い。堆積土は単層で地山の斑が多量に入る。底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。長軸の両端も垂直に立ち上がり終端が明確なため、収束する溝や道等ではないと思われ、出土遺物もなく、性格等不明である。

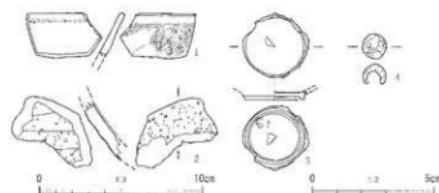
また調査区の北西側において、最大幅1mほどの小規模な溝が検出された。検出面からの深20cm程で北東—南西方向に軸を持つ。この溝と西側の土壘との間の平面三角形の範囲は、地山削り出しによる平坦面の上に厚15cmほどの人為的な盛土がなされ、掘立柱建物等のある曲輪の平坦面部分より50cm程高い段状の空間となっている。当溝については客土上より掘り込まれており、杉の根切り等、最近構築されたものかと思われる。また、この段状部分そのものについても今回調査によって一定面積の調査をおこなったが、遺構は検出されなかった。ただし調査範囲の多くを樹根が占めていたため、遺構の有無については明確ではない。

大型掘立柱建物と土壘との間に位置する本調査区の空間については、土壘を借景とした庭園の存在する可能性が整備専門委員会によても指摘されていたが、今回調査において庭園の存在を示す遺構は検出されなかった。

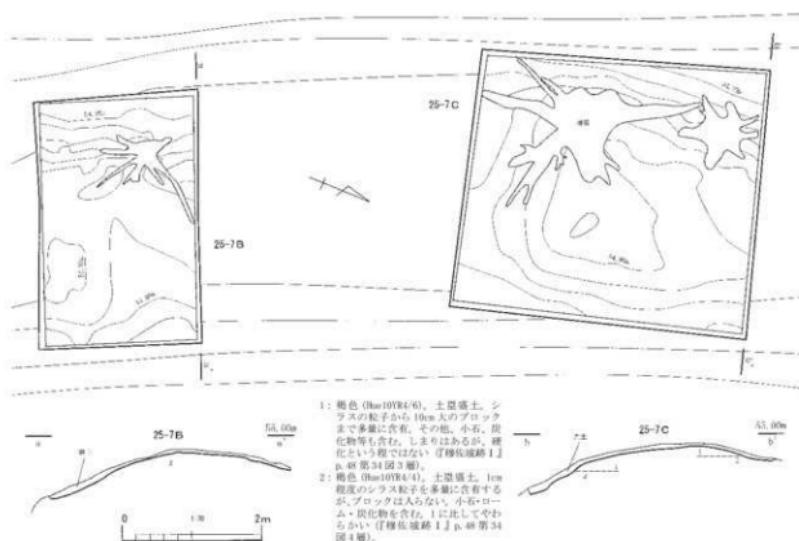
【出土遺物】1は土坑2の1層より出土した青花、2も同じく土坑2出土の青磁である。3は客土中より出土した華南産青釉小皿であるが、前調査の表土中出土のもの(宮崎市教委編2013年p.51第36図169)と接合したため、再実測のうえ掲載した。4も同じく客土中出土の火縄銃の弾である。

第2項 曲輪7土壘上

25-7B(第9図)曲輪7西端の土壘上における柵列等の構築物確認のため、土壘上南側に設定した2.4×3.5mのトレンチである。厚10cm弱の表土下は土壘構築のための人為的盛土となる。調査範囲においてはピット等、構築物の存在を示すものは検出されなかった。ただし、土壘西側はそのまま大型の空堀IIとなっており、土壘際が崩落している可能性もあるため、本来的に柵列等が存在しなかったとも断定できない。



第8図 25-7A 出土遺物実測図 (Scale=1/3 ※4:1/2)



第9図 25-7B・C平面図・土壌図 (Scale=1/70)

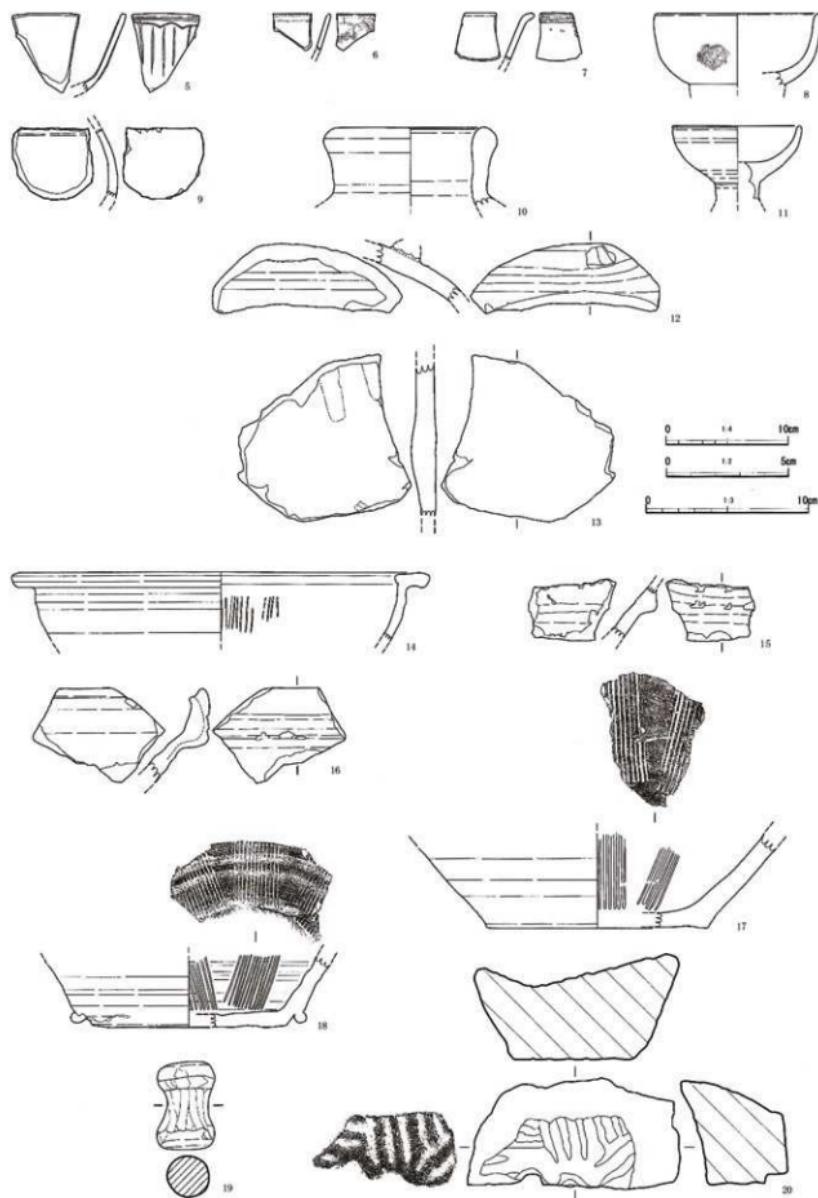
25-7C (第9図) 25-7Bと同じく土星上における柵列等の有無確認のために土星上北側に設定した 4.3×3.9 m のトレンチである。調査結果も 25-7B と同様で、厚 cm 弱の表土下は人為的盛土となり、構築物の存在を示す遺構は一切検出されなかった。なお、当調査区の地点は土星上でも最も標高が高く、前述の南側に位置する 25-7B 付近はやや低くなっている。当調査区では土星構築の人の為の盛土が上下 2 種確認されたが (1・2 層)、25-7B では下位の 2 層しか確認されなかった。ともにしまりはあるが硬化していると表現できるほどではなく、低くなっている土星南側の現況の地形は、本来的なものではなく、上位の盛土が流出してしまったためとも考えられる。

第3項 曲輪7・8間斜面

25-7D (第10・11図) 曲輪7と曲輪8の間の斜面西端において、曲輪7の平坦面際（北端）から斜面、曲輪8の南際にかけて設定した 3.6×8.9 m の調査区である。曲輪7平坦面際における柵列等の構築物の有無確認、斜面の様相確認のために設定した。

曲輪7の平坦面際では土坑2基と構1条、ピット1基が検出された。検出された土坑2基とともに平面不整形であるが、曲輪7平坦面際に位置し、曲輪7・8間斜面の形成時に、おそらくは遺構の大半を削平されている。

溝1は前調査において検出された幅 2.4 m の南北方向の溝で、南に進むに従ってスロープ状に浅くなり、曲輪7平坦面の中ほどで収束する (宮崎市教委編 2013年 p. 40)。曲輪7と曲輪8を



第11図 25-7D出土遺物実測図 (Scale=1/3 ※19:1/2, 20:1/4)

結ぶ通路と想定し、当調査区はこの遺構に重ねる形で設定したが、斜面までは伸びず曲輪際手前で収束している。

曲輪7・8間の斜面そのものは地山シラス層の削り出しにより形成され、立ち上がりの角度は約40度でやや緩やかである。前調査において曲輪8南際では同じく地山シラス層の削り出しによる、曲輪8平坦面からの比高差50cm前後の犬走り状の段が確認されており、曲輪7平坦面とこの曲輪8犬走り状段の比高差は約3.0mである。斜面中には地山上に最厚70cm（斜面直交の計測値）もの堆積があるが、多くは大型の地山ブロックを多く含む崩落土である。通路、階段等、城郭にともなって斜面中に意図的に構築されたと思しき遺構の検出はない。

【出土遺物】遺物はすべて客土中出土で、曲輪7平坦面の6、曲輪8の19、斜面出土のものと曲輪8出土のものが接合した13をのぞきすべて斜面中の出土である。15世紀末以前に比定される備前播鉢17とともに16世紀代に比定される同じく備前播鉢16・18、線彫り蓮弁文の青磁碗5、さらに近世の染付8やサツマ播鉢14など時期幅が広い。また土製品19は組み紐の糸巻である。

25-7E（第12図）曲輪7と曲輪8の間の斜面西半において、前述の25-7Dから8mほどの間を空けて東隣に設定した1.2×8.4mの調査区である。25-7Dと同じく曲輪7平坦面際における柵列等の構築物の有無確認、斜面の様相確認のために曲輪7の平坦面際（北端）から斜面、曲輪8の南際にかけて設定した。

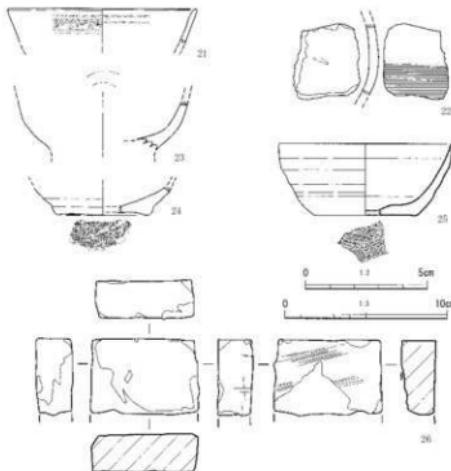
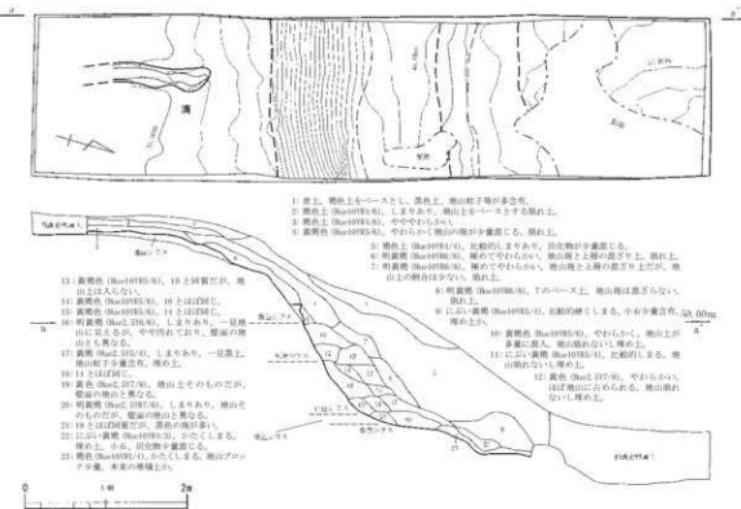
曲輪7際においては南北方向に伸びる幅0.25mの小型の溝が検出された。雨落ち溝等の可能性もあるが、前調査を含め、城郭に伴うものとはやや印象が異なり、後世のものである可能性も考えられる。

斜面そのものは25-7Dと同じく地山シラス層の削り出しによるが、角度は60度近くあってやや傾斜がきつい。曲輪8際には犬走り状の段があるが、30cmほどの段差をもって上下2段に分かれている。曲輪7平坦面と曲輪8犬走り状段の上段との比高差は2.4mである。斜面中には最厚1.5m（斜面直交の計測値）もの堆積があり、25-7Dと同じく崩落土である。本調査区では斜面中の地山直上で、シラスそのものの崩落土も確認された。この斜面中の堆積土および犬走り状の段上には大型の礫が集中して多数含まれており、前調査で検出された破城時の転落礫と考えられる集疊1（宮崎市教委編2013年pp.79-81）と一連のものである。通路、階段等、城郭にともなって斜面中に意図的に構築されたと思しき遺構の検出はない。

【出土遺物】すべて曲輪7平坦面から斜面にかけての客土中出土である。26は砥石で使用痕が認められる。25-7Dと同じく時期幅が広く、青花21とともに近世の蛇の目釉剥ぎを有するサツマの碗23が出土している。

25-7F（第13図）前述の25-7Eから8mの間隔を空けて東隣に、前調査において検出された階段状の曲輪7・8間通路の西隣に設定した1.2×9.3mの調査区である。25-7D・25-7Eと同じく曲輪7平坦面際における柵列等の構築物の有無確認、斜面の様相確認のために曲輪7の平坦面際（北端）から斜面、曲輪8の南際にかけて設定した。

曲輪7平坦面際においては土坑2基、溝状遺構1条、ピット4基が検出された。土坑30は長軸0.85



第12図 25-7E 平面図・土層図 (Scale=1/60)
および出土遺物実測図 (Scale=1/3 ※26:1/2)

m、短軸 0.6m の平面長方形で、検出面からの深 0.35 m、壁面はほぼ垂直で床面は平坦である。

溝は東西方向、平坦面際に並行するように走っている。上端幅は 0.45 m ほどで、断面形は不整形な V 字状を呈し、雨落ち溝の可能性が考えられる。

斜面そのものは 25-7D・25-7E と同じく地山シラス削り出しによる。傾斜角は 50 度弱で、曲輪 7 平坦面と曲輪 8 隣曲輪 7 斜面との比高差は 2.8 m である。斜面中には地山上に最厚 50 cm (斜面直交の計測値) 程度の堆積があり、多くは大型の地山ブロックを多量に含む崩落土である。斜面中に構築された遺構の検出はない。

【出土遺物】 31・34 は土坑 6 出土で、他はすべて曲輪 7 から斜面にかけての客土中出土である。特筆すべきは焼き上がりが軟質な平瓦 35・36 で、堂などの瓦を使用した小規模な建物が曲輪 7 に存在した可能性が考えられる。



第13図 25-7F 平面図・土層図 (Scale=1/60)・土坑30実測図 (Scale=1/30)
および出土遺物実測図 (Scale=1/3 ≈37:1/2)

第3節 平成26年度の調査

第1項 曲輪7出入口(虎口)

26-7A (第14・15図) 前調査において曲輪7南東端に検出された出入口(宮崎市教委編2013年PP.42-47)について、その形状確認のために前調査の調査区を南に1.5m拡張する形で調査をおこなった。今回調査時には出入口の形状の流れを確認するため、一部前調査時の調査区復旧もおこなったため、26年度調査時の調査面積は60.9m²である。

前回調査時には、この出入口は埋め戻しをともなう作り替えがおこなわれており、この作り変えによる後出の出入口(上層出入口と通路②)は東から進入したのち北に屈曲するL字状の平面形であり、屈曲部における曲輪面から底面までの比高差は0.65mほどであること、作り変え以前の当初の出入口(下層出入口と通路①)は曲輪7南東端位置で上面幅4.9m、下面幅2m、深さ2mの大規模なものであること、東から進入したのち北に通路が伸びること等を確認している。加えて、壁面の流れから同時に南方向にも通路が伸びるT字状の平面形である可能性も指摘している。今回調査ではこのT字状の平面形を明確に確認するために調査区の拡張をおこなった。

結果として地山シラス土削り出しによる下層出入口の壁面が東から進入した後、南方向に屈曲することを明確に確認し、下層出入口の構造はT字状であることが確定した。なお現地表から1.0～1.2mの深さにおいて下層出入口壁面の流れが確認できたため、それ以上の掘り下げはおこなわなかつた。

また調査区南西端において、2層上面に一部堆積土が硬化した部分が確認され、平面では東から北へL字状に曲がるコーナー部が形成されている。上層出入口にともなうコーナーの可能性もあるが、層位の検討より近年のものである可能性が高い。

【出土遺物】遺物の多くは4a・4b・8・9層出土であるが、蛇の目軸剥ぎの38のみ6層出土である。38は16世紀後半から17世紀前半に比定されることから、16世紀後半の出入口部の作り替えか、17世紀前葉の破城にともなうものかと思われる。また潰れた火縄銃の弾44も出土している。

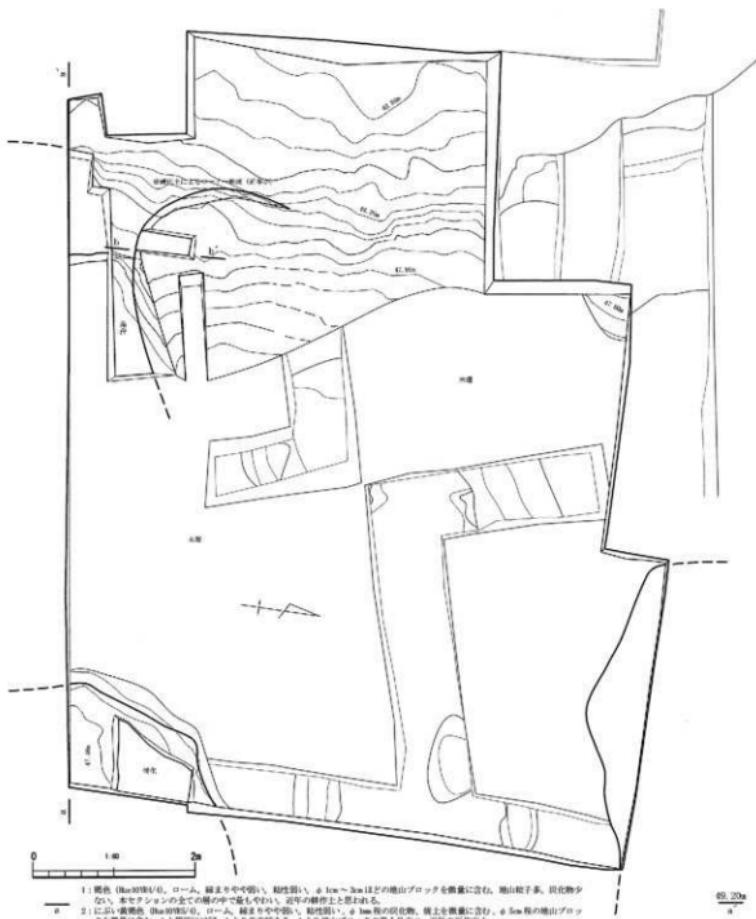
第2項 曲輪7東端の堀

26-7B (第16図) 前述の曲輪7南東端における下層出入口から北方向に伸びる曲輪7東端の堀(通路①)について、その規模を確定させるために東西方向に設定した0.8×6.4mのトレーニチである。現地表から深30cmで堀の東側肩口を検出し、前調査の結果とあわせて、当地点における規模は上端幅3.5m、底面幅1.8m、深2.6mと確定した。今回調査においては、現地表からの深60cmで層序の確認ができたと判断したため、それ以上の掘り下げはおこなわなかつた。

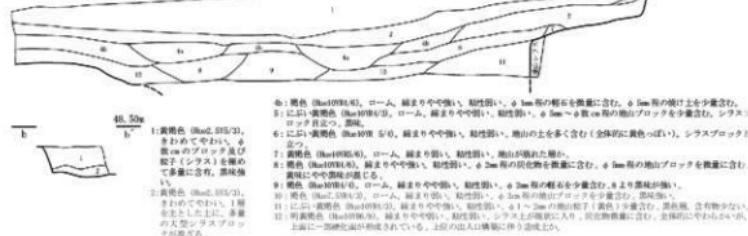
【出土遺物】5～7層中より15世紀後半～16世紀中頃に比定される白磁皿45が出土した。

26-7C (第16図) 26-7Bと同じく曲輪7東端の堀の規模を確認するために設定した最大幅1.6×8.1mのトレーニチで、前調査の21年度調査区東西方向の土層確認ベルト(宮崎市教委編2013年p.29)の延長線上に設定した。現地表からの深20cmで堀の東側肩口を確認し、前調査の結果とあわせて、当地点における規模は上端幅4.3mと確定した。今回調査においては、現地表からの深85cmで前調査との整合性が確認できたと判断し、それ以上の掘り下げはおこなわなかつた。

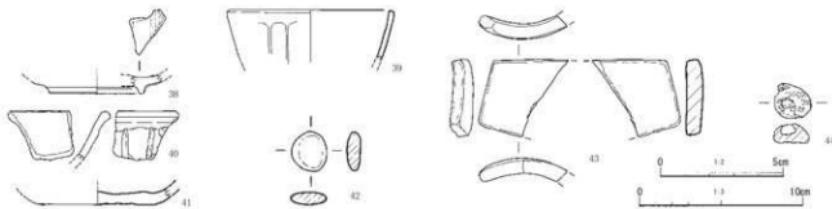
【出土遺物】8～12層より15世紀後半～16世紀中頃に比定される青磁47が出土している。



1: 黄色 (Hue10YR4/0), ローム, 線まりやや弱い, 粘性弱い, \pm 1cm ~ 3cm ほどの地山ブロックを微量に含む。地山粒多, 固化物少ない。
 2: にじみ黄褐色 (Hue10YR4/3), ローム, 線まりやや弱い, 粘性弱い, \pm 5cm ~ 6cm の地山ブロックを少量含む。シラズブロックを微量に含む。
 3: 黄色 (Hue2.0YR4/0), シルト, 線まりやや弱い, 粘性弱い, 地山の上に形成。よりやや堅まこと。より地山ブロックの混入自止し。水平の瓦状化。
 4: 黄色 (Hue2.0YR4/0), ローム, 線まりやや弱い, 粘性弱い, \pm 3cm 程の地山ブロックを微量に含む。



第14図 26-7A 平面図・土層図 (Scale=1/60) ※調子落としは平成20~23年度調査



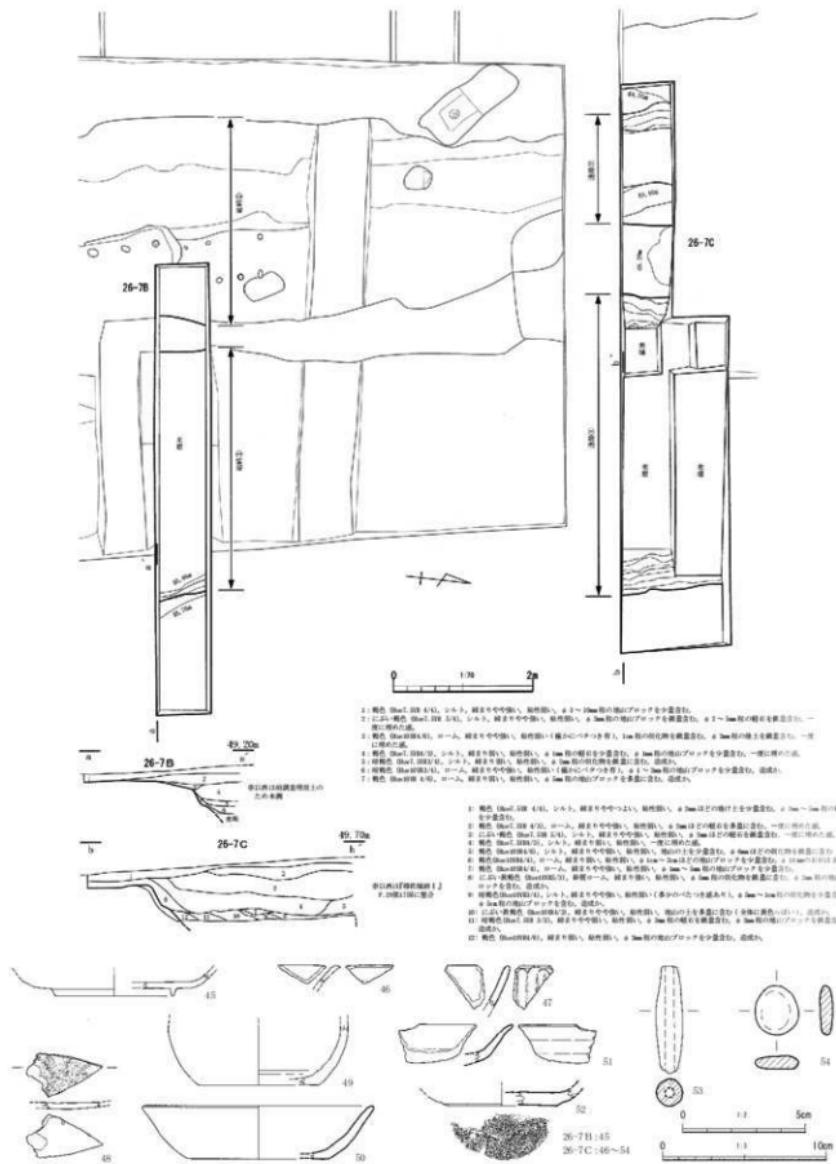
第15図 26-7A出土遺物実測図 (Scale=1/3 ※42~44:1/2)

26-7D（第17～21図）曲輪7北東端に設定した最大幅2.5×4.0mの調査区である。前調査において下層出入口から北方向に伸びる堀（通路①）は曲輪平坦面から底面まで2.5～3.0mの深さをもって伸び、そのまま曲輪7の一段下である曲輪8へと抜け、溝2に接続することを確認している（宮崎市教委編2013年pp.74-76）。

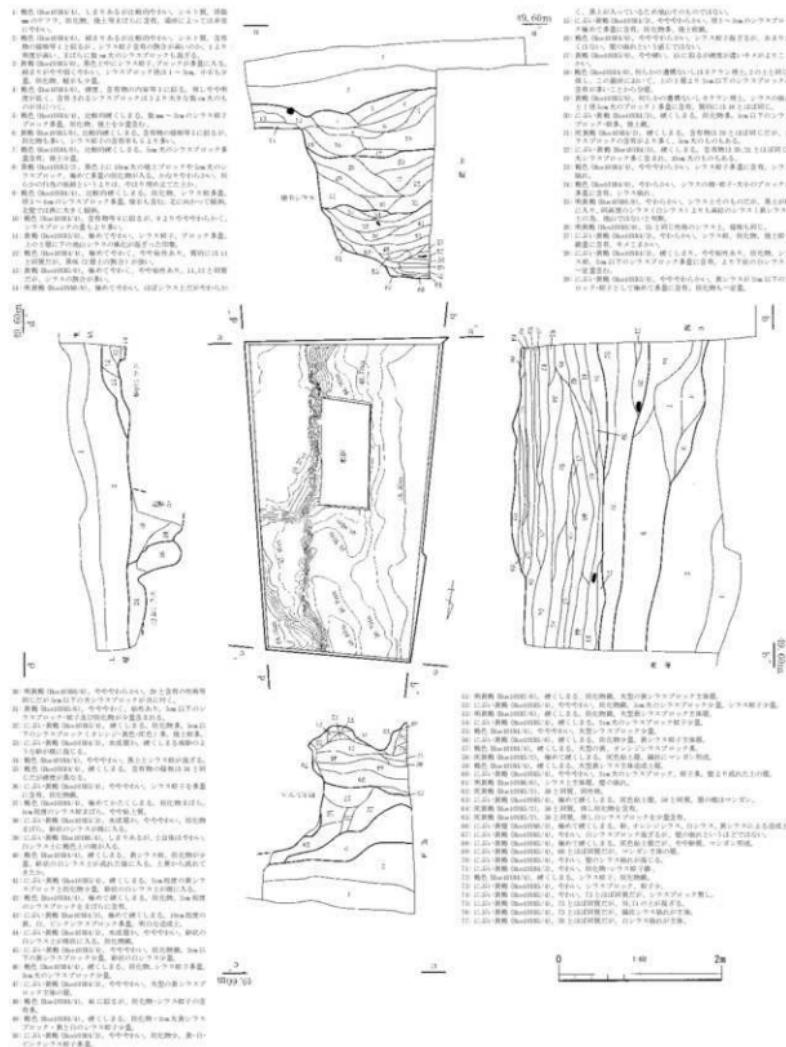
今回調査箇所はこの東端の堀が、曲輪8に接続する曲輪7側の終端部分にあたり、堀の東半のみ掘り下げをおこなった。検出面から地山シラス層による底面まで深2.5m、現地表からは2.8mを測る。東側壁面の立ち上がりは垂直に近いが、下部の壁際には幅60cmほどの狭小な犬走り状の段が設けられ、さらに北側ではこの段が更にもう一段設けられている。

堆積土は硬さや含有物、堆積の単位などから、大きく4つに分けられる。便宜的に上位から堆積土①～④として以下に述べる。最上位の堆積土①（1・2層）は比較的やわらかく、全面にわたってほぼ水平に堆積するが、曲輪際である北方向に向かってわずかに傾斜がつく。堆積土②（3～17層）は数cm大の地山シラスブロックの含有が目付く。調査区内南側はやや細かな単位で入るが、北側は広範囲にわたって単層である。1・2層と同じく北側に向かってわずかな傾斜がつく。この一群は比較的しまりはあるものの基本的にはやわらかく、埋め戻しによって一時に入れられた土との印象を受ける。その下の堆積土③（20～32層）は、単位やシラスブロックを中心とする含有物等、堆積土②の様相と似るが、非常に硬く、人為的に叩き締められているものと見受けられる。堆積土②・③とともにシラスブロックだけではなく焼土や炭化物を含有し、また多量の遺物を含む。最下位の堆積土④（34～77層）は非常に細かな単位で、かつ極めて硬い。特に58層以下は厚5cm前後の非常に細かな単位で灰色粘土とシラス土が交互に積み重ねられ、層の境には複数個所、マンガンの沈澱層も形成されている。層中には水が流れたと思しき砂を含む層もある。またシラスによる壁面の下部には水の浸食によるものか、一部オーバーハングしている箇所もあった。堆積土④も③と同じく人為的に叩き締められて形成されたものと見受けられる。

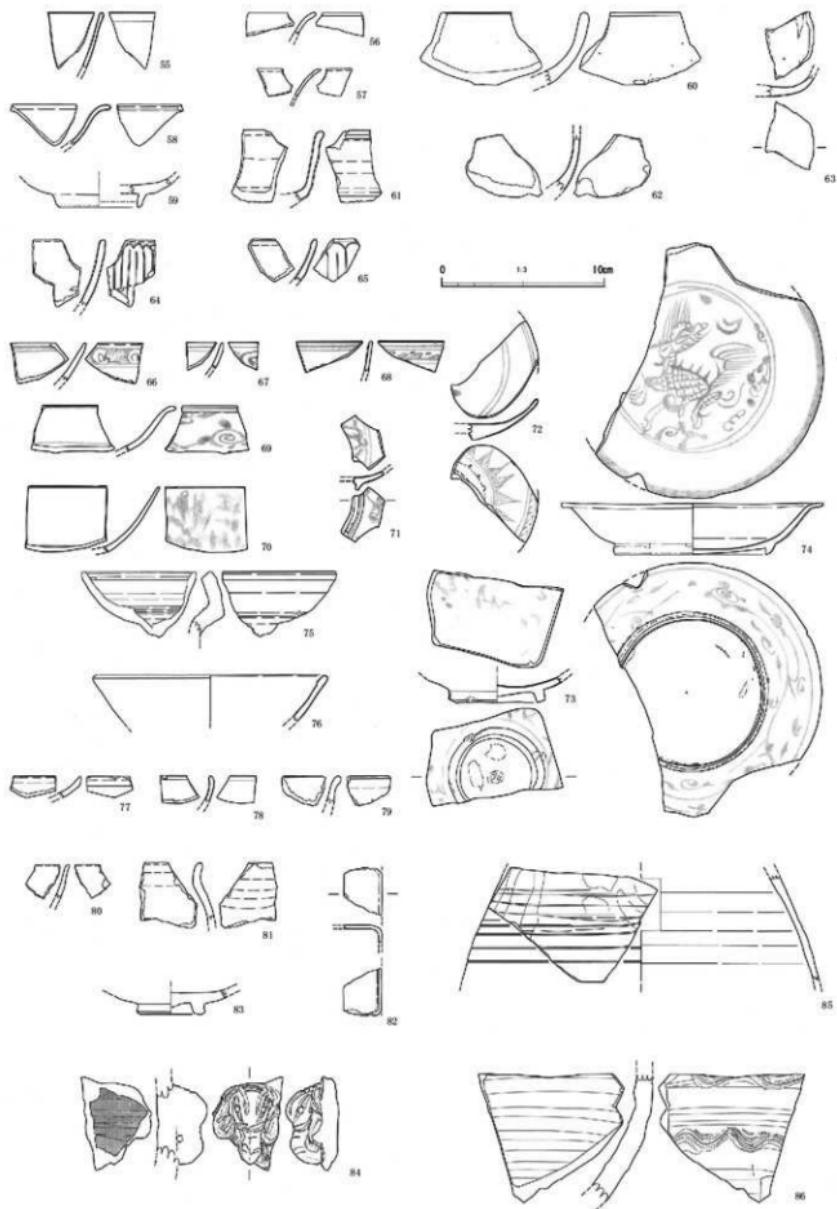
【出土遺物と堆積土の性格】 最上位の堆積土①は、2層中から寛永通宝135なども出土しており、廃城後、近世以降の耕作等にともなう土かと思われる。なお堆積土①からは特筆すべき遺物として瓦質土器の象頭耳84が出土しているが、年代、産地等不明である。瓦質のため国内産であろうか。堆積土②には16世紀半ば以前のものが多く含まれるが、最も新しい遺物は16世紀中葉～17世紀初頭に比定される捕鉤92・93である。年代的には通路①を埋めて通路②や平坦面を造成した時のものである可能性もあるが、土の様相から廃城時の埋土の可能性が高いと考えられる。



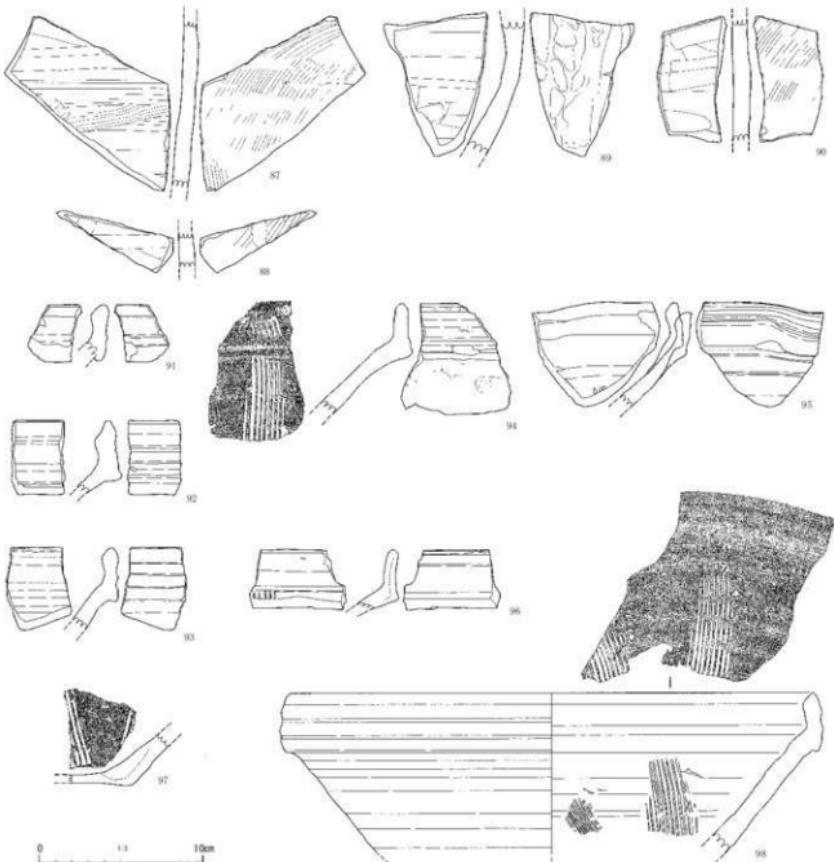
第16図 26-7B・C平面図・土層図 (Scale=1/70)・出土遺物実測図 (Scale=1/30 ※53・54:1/2)



第17図 26-7D平面図・土層図 (Scale=1/60)

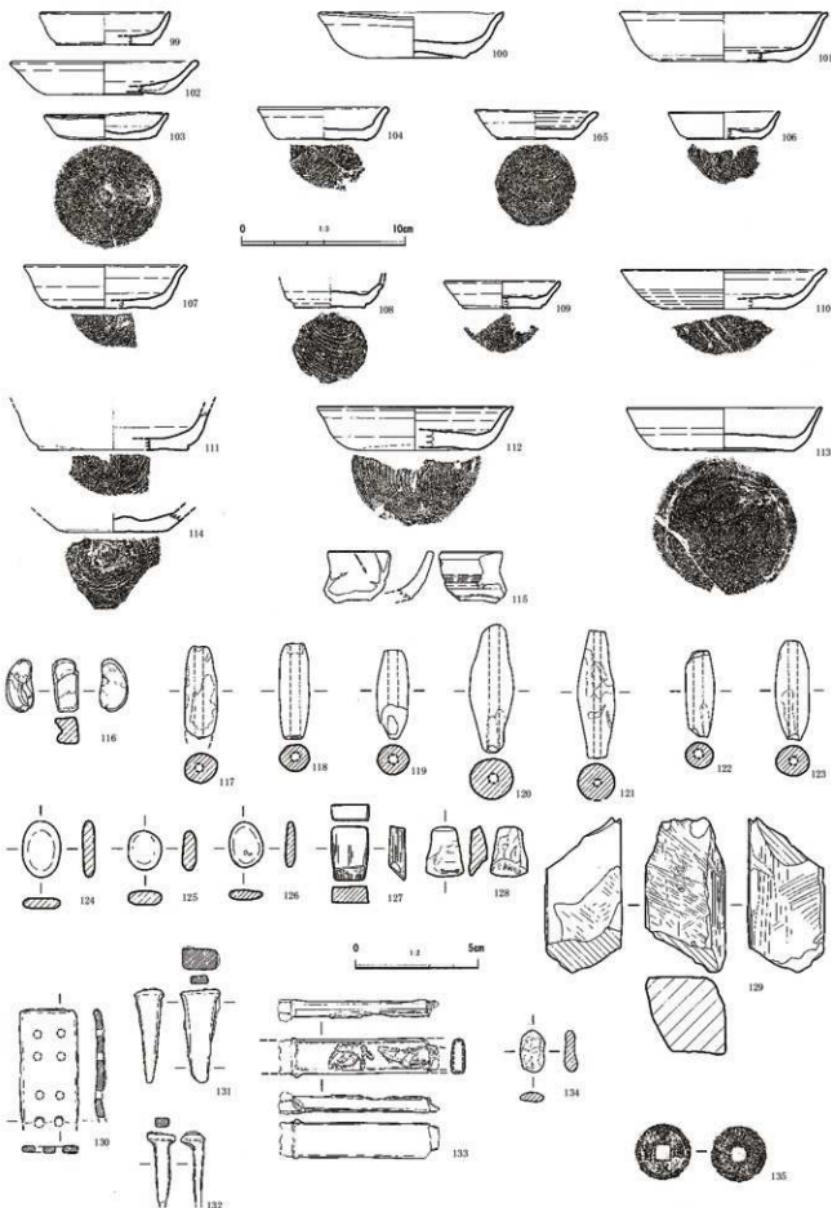


第18図 26-7D出土遺物実測図① (Scale=1/3)



第19図 26-7D出土遺物実測図② (Scale=1/3)

堆積土③出土遺物のうち最も新しい年代観を持つものは15世紀後半～16世紀中頃に比定される青花74である。遺物そのものは年代幅が大きいが、土の様相は硬く縮められ、検出された地山シラスによる堀の東側肩口からは約30cmの深さより堆積していることから浅い通路を形成していたと考えられ、埋め戻しによる作り替えの上層出入入口に接続する通路の可能性が考えられる。ただし、年代決定のできる遺物が少なく確定的ではない。堆積土④出土遺物のうち最も新しい年代観を持つものは16世紀初頭～17世紀初頭に比定される擂鉢95および16世紀初頭～16世紀後葉に比定される擂鉢98であるが、遺物そのものの年代幅が大きい。輸入陶磁の年代観も併せて考えると、16世紀中頃以前と考えられる。版築状の灰色粘土とシラス土は、弱い土であるシ

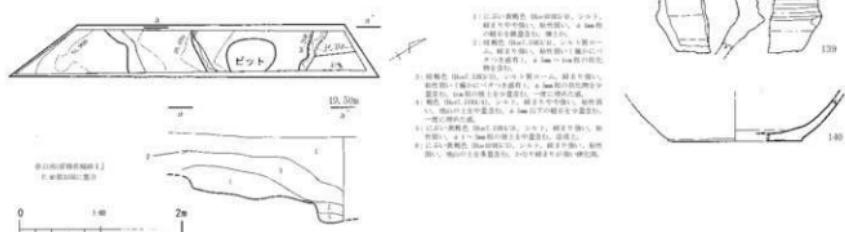


第20図 26-7D出土遺物実測図③ (Scale=1/3 ※116~135:1/2)

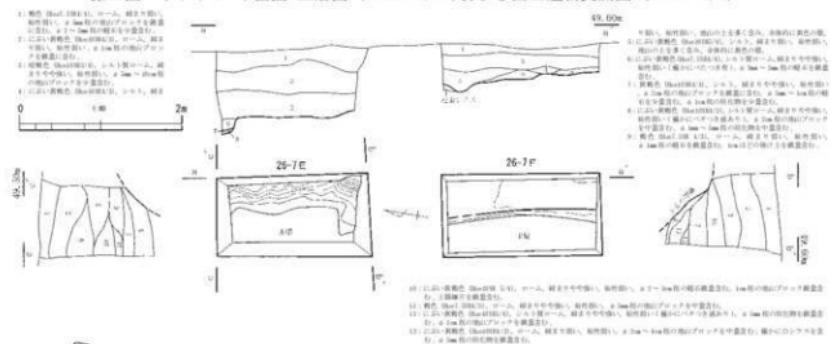
ラス土をむき出しでは通路としての使用ができないため、路面のいわば舗装をしたものと思われ、下層出入口に接続するこの堀の、当初の使用時のものと思われる。層中、複数回水が流れたと思しき痕があったため、何度も舗装を繰り返しながら使用され続けたものと思われる。前述の遺物



第21図 26-7D出土遺物実測図④ (Scale=1/3, 138:2/3)



第22図 サブトレ4平面図・土層図 (Scale=1/60) および出土遺物実測図 (Scale=1/3)



第23図 26-7E・F平面図・土層図 (Scale=1/60) および出土遺物実測図 (Scale=1/3 ※145・146:1/2)

の年代観より 16 世紀初頭～16 世紀中頃にこの通路①およびこれに接続する下層出入口が構築された可能性が高いと考えられる。

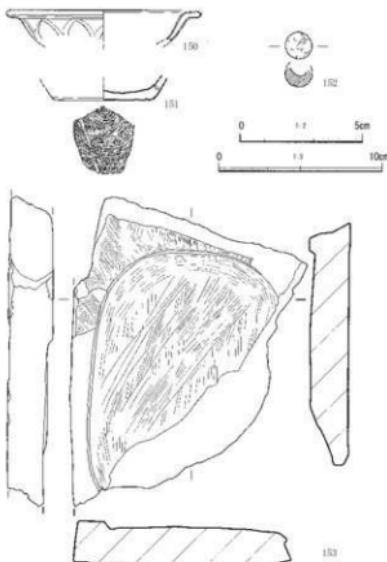
サブトレ 4（第 22 図） 前調査におけるサブトレ 4（宮崎市教委編 2013 年 p. 46）の北東側への拡張（延長）を 2 m おこなった。当サブトレーンチは上層出入口から北に伸びた通路（通路②）が西方向（曲輪中央方向）に屈曲する地点にあたる。この通路は曲輪 7 の平坦面際（北辺）を西方向に伸びたのち、曲輪の中ほど手前で収束するが、前回調査では外側（北側）の立ち上がり検出には至っていなかった。

前回調査サブトレ 2（宮崎市教委編 2013 年 p. 46）では現況の曲輪 7 際近くまでトレーンチを入れたが、外側立ち上がりの検出には至らなかつた。今回調査でもこの外側の立ち上がり検出を企図して前回調査サブトレ 4 の拡張をおこなつたものであるが、サブトレ 2 と同じく、現況の曲輪際近くまで拡張しても、立ち上がりを検出することはできなかつた。そのため現状では、この西方向通路の明確な規模は不明である。確認できた範囲では、内側は幅 1 m 前後の段が 2 段設けられている。最深部は曲輪平坦面からの深さ 1.0 m で、最下層は硬く叩き締められているため、これが通路本来の底面の可能性が高い。前回調査サブトレ 2 でも同様の深ではほぼ平坦な部分が幅 1 m の範囲で検出されている。

【出土遺物】16 世紀中頃～17 世紀初頭の擂鉢 139 が出土し、上層出入口の年代と矛盾はない。

26-7E（第 23 図） 26-7Cにおいて検出した堀の東側肩口が標高 49.0 m であったのに対し、26-7Dにおいて検出した同部分は 48.3 m であり、比高差が大きかったため、その変化点をとらえるために 26-7C と 26-7D の間に南北方向で設定した 1.0×1.8 m のトレーンチである。現地表より深 1.4 m で肩口を明確に捉えたと判断し、それ以下の掘り下げはおこなわなかつた。当トレーンチで捉えた肩口の標高は 48.5 m であるが、トレーンチ北端において 20 cm ほどの段落ちになつており、26-7D における肩口の高さに対応する。また南端は緩やかに上がる。

26-7F（第 23 図） 前述の 26-7E 同じ目的で、26-7C との間に設定した 1.0×2.0 m のトレーンチである。26-7E 同様、現地表より深 1.4 m で堀の肩口を明確に捉えたと判断し、それ以下の掘り下げはおこなわなかつた。肩口の高さは南端において 49.0 m で、26-7C における高さと対応する。トレーンチ内でごく緩やかに北に向かって下がる感がある。



第 24 図 その他の出土遺物実測図

(Scale=1/3 ※152・153:1/2)

第4節 自然科学分析（抜粹）※株式会社古環境研究所委託成果品より編者抜粋

第1項 植物珪酸体分析

土坑2 土坑底部の5層（試料5）では、イネが多量に検出され、イネの初穀（穎の表皮細胞）、ムギ類（穎の表皮細胞）、スキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、マダケ属型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）なども認められた。イネの密度は27,100個/gと極めて高い値であり、稻作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを大きく上回っている。ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は700個/gと低い値である。4層（試料4）ではイネが増加しており、密度は37,600個/gと極めて高い値である。イネ以外の分類群では、スキ属型がやや増加し、キビ族型が出現している。ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は1,400個/gと比較的低い値である。3層（試料3）から1層（試料1）にかけては、イネが減少しているが、密度は7,700～14,600個/gと高い値である。イネ以外の分類群については、4層とおおむね同様の結果であり、ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は600～1,300個/gと低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、各層ともイネが優勢であり、とくに4層と5層では圧倒的に卓越している。

土坑28 土坑底部6層（試料6a,6b）では、キビ族型、スキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出され、部分的にウシクサ族B、ネザサ節型、樹木（その他）なども検出されたが、いずれも比較的少量である。

植物珪酸体分析から推定される植生と環境

【土坑2】 土坑2の埋土では、底部付近を中心にイネが極めて多量に検出され、イネの初穀（穎の表皮細胞）やムギ類（穎の表皮細胞）も認められた。このことから、同遺構には何らかの形で稻藁（もしくは藁製品）が入れられていた可能性が考えられる。稻藁の利用としては、建物の屋根材や壁材、藁製品（俵、縄、ムシロ、草履など）および燃料など多様な用途が想定される。ムギ類についても、何らかの形で利用されていた可能性が考えられる。

当時の遺構周辺は、スキ属やチガヤ属などが生育する比較的開かれた環境であり、周辺にはメダケ属（メダケ節やネザサ節）やマダケ属（もしくはホウライチク属）などの竹笹類が生育し、シイ属やイスノキ属などの樹木（照葉樹）も見られたと推定される。

マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。ホウライチク属は、桿の纖維が火縄錠の火縄の素材となる。なお、メダケ節型としたものについては、植物珪酸体の形態では識別が困難なヤダケ属に由来する可能性も考えられる。ヤダケ属の稈は矢柄の素材などとして有用であり、当時の調査区周辺に植栽されていた可能性も想定される。

【土坑28】 土坑28の埋土底部の堆積当時は、スキ属、ウシクサ族（チガヤ属など）、キビ族、ササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節）などが生育していたと考えられ、周辺には何らかの樹木が生育していたと推定される。ここでは、同遺構で利用された植物の検出が期待されたが、これを示唆するような結果は得られなかった。

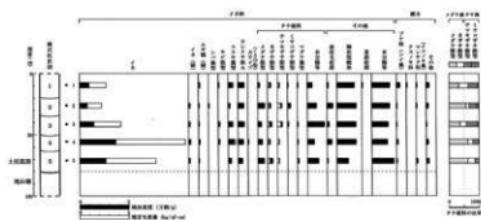
第2項 花粉分析

土坑2 土坑底部の5層（試料5）では、クワ科—イラクサ科、イネ科、ナデシコ科、アブラナ科、

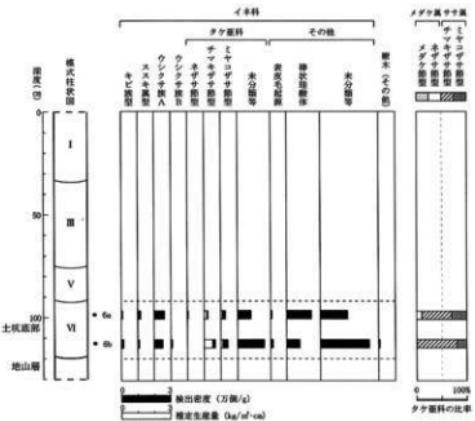
表 1 植物球孢子分析結果

表2 花粉分析結果

学名	分類群 和名	土壌 2			1/100
		2	5	6a	
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ				1
<i>Castanea crenata</i>	クリ		2		
Arboreal - NonarboREAL pollen	樹木・草木花粉				
<i>Muraceae-Litseae</i>	ムラサキ科・リラクサ科			1	
Nonarboreal pollen	草木花粉				
Gramineae	イネ科	7	9		
Cyperales	ナシ科		1		
Osmundaceae	アツバタケ科	3	1		
Lacustrinidae	シノブ科	1	1		
Asteroidae	キク科	1	1		
Arizantidae	ヨモギ属	1	1		
Fern spore	シダ類胞子				
Monolete type spore	单球腹胞子	8	4		2
Trilete type spore	三棱腹胞子		1		
ArboREAL pollen	樹木花粉	2			1
ArboREAL - Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉		1		
Nonarboreal pollen	草木花粉	12	14		
Total pollen	花粉總量	14	15	1	
Pollen frequencies of 1cm ⁻³	試料1cm ³ 中の花粉密度	1.2	1.0	0.4	
		×10 ⁵	×10 ³	×10	×10
Unknown pollen	未定花粉	3	5	5	
Fern	シダ類胞子	5	5	2	
Hedmagnum eggs	鶴嘴類卵子	(+)	(-)	(-)	
Chloroglassidium	綠藻類孢子	(+) (c)	(+)	(c)	



第25図 土坑2における植物珪酸体分析結果



第26図 土坑28における植物珪酸体分析結果

タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属、シダ植物胞子が検出されたが、いずれも少量である。2層（試料2）では、クリ、イネ科、アブラナ科、タンボボ亜科、ヨモギ属、シダ植物胞子が検出されたが、いずれも少量である。

土坑28 土坑底部の6層（試料6a）では、スギ、シダ植物単条溝胞子が検出されたが、いずれも少量である。

考 察

【土坑2】 土坑底部の5層では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、イネ科、ナデシコ科、アブラナ科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属、クワ科ーイラクサ科などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境が示唆される。花粉があまり検出されない原因としては、1) 乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、2) 土層の堆積速度が速かったこと、3) 水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられるが、ここでは1)の要因が大きいと考えられる。

2層についても、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、5層とおおむね同様の状況であったと考えられ、周辺にクリが生育していた可能性も認められた。

【土坑28】 土坑底部の6層では、花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

土坑28はトイレ（便所）遺構の可能性が指摘されていたが、寄生虫卵は検出されなかった。寄生虫卵については、花粉と同様の残存状況を示すことから分解消失した可能性が考えられるが、当初から含まれていなかつた可能性も考えられる。なお、トイレ遺構の分析では、寄生虫卵の分布が層位的に大きく偏る傾向があることから、遺構底部を中心により多くの試料について検討を行うことが望まれる。

【引用・参考文献】

- 上田秀夫 1982年「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
小野正敏 1982年「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
田中克子 2011年「博多遺跡群出土の中国貿易陶磁と対外貿易」『博多研究会誌』20周年記念特別号 博多研究会
宮崎県埋蔵文化財センター編 2012年『塙見城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第210集 宮崎県
埋蔵文化財センター
宮崎市教育委員会編 2013年『史跡 穂佐城跡I』宮崎市文化財調査報告書第94集 宮崎市教育委員会
森田 勉 1982年「14～16世紀の白磁の分類と編年について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

表3出土器・陶磁器観察表①

測量番号	番号	造 売	種 別	形 番	復元	色 調	地成	調 整・文 標					備 考	測 定 号		
								外面	内面	A	B	C	D	E		
p.10 第8回	1	25-T8 土底 2.1層	青花	一	—	—	灰白	灰白	堅版	草花文	界線				15C後半以降	26
	2	25-T8 土底 2	青磁	—	—	—	オリーブ灰	オリーブ灰	堅版						釉厚く粗れ多 徒放紋の 凸丸状多	5
	3	25-T8 客土	青磁	—	3.6	—	青灰	青灰	堅版						16C「修佐城跡1」 p.54 第3回169と接合	23
p.13 第13回	5	25-T9 斜面	青磁	—	—	—	明暦灰	明暦灰	堅版	蓮弁文					15C後半～16C中頃 上 田B・IV 線脚	39
	6	25-T9 曲輪7客土	青花	—	—	—	明暦灰	明暦灰	堅版	染付	二重界線				15C後半以降	13
	7	25-T9 斜面	青花	—	—	—	明暦灰	明暦灰	堅版	二重界線				15C後半～16C後半 小 野B・II	40	
	8	25-T9 斜面	愛付	(10)	—	—	明暦灰	明暦灰	堅版	染付	—	少		近世 くらわんか窯	38	
	9	25-T9 斜面	胸器	(10.6)	—	—	建手灰	にじみ青	堅版	施釉	無釉				4	
	10	25-T9 斜面	胸器	—	—	—	灰褐	灰褐	堅版	回転ナデ	回転ナデ	5 5 少			34	
	11	25-T9 斜面客土	胸器	8.1	—	—	暗灰	暗灰	堅版	施釉 同 施釉	施釉				29	
	12	25-T9 斜面	胸器	—	—	—	暗灰	暗灰	自然	施釉 同 施釉	施釉				30	
	13	25-T9 曲輪8	胸器	—	—	—	にじみ青	にじみ青	堅版	施釉	施釉	2 2 少		長石、石英 T:2mm以下少	31	
	14	25-T9 斜面	模様	(25.8)	—	—	灰	灰	堅版	口縁重ね	施ナシ 同施				近世	29
p.15 第15回	15	25-T9 東端系	模様	—	—	—	10V84/2	10V84/2	堅版	口縁重ね	施ナシ 同施				33	
	16	25-T9 斜面	模様	—	—	—	暗灰	暗灰	良好	同軸ケズ リナデ	同軸ケズ リナデ	1 1 多		16C初～17C初	32	
	17	25-T9 斜面	模様	(13.8)	—	—	にじみ青	にじみ青	堅版	回転ナデ	条子の笠射 状の櫻口日				15C末以降 土中砂粒多	36
	18	25-T9 斜面	模様	(12)	—	—	暗灰	暗灰	堅版	回転ナデ	回転ナデ	5 少		15C後半以降 土精良 使 用磨擦	35	
	21	25-T9 曲輪7	青花	(11.4)	—	—	明暦灰	明暦灰	堅版	露灰	二重界線				15C後半以降	22
	22	25-T9 曲輪7～鉢輪 道・塹	胸器	—	—	—	露灰	露灰	上部：施 釉 下部：自然						9	
	23	25-T9 セツマ	—	—	—	—	建手灰	建手灰	堅版	施釉	施釉	1		若世 入込み虹/日袖割	11	
	24	25-T9 曲輪7	土師器	(6.2)	—	—	にじみ青	にじみ青	良好	回転ナデ	T.具 痕少 有り	2 少			泥面:ナデ	8
	25	25-T9 曲輪7	土師器	10.6	6.4	4.4	10V86/3	10V87/4	にじみ青	回転ナデ	回転ナデ				底面:赤茶ナデ 0.5mm 以下の躍面(乳白色)微	10
p.16 第15回	27	25-T9 斜面	青磁	—	—	—	オリーブ灰	オリーブ灰	堅版					14C後半～15C中頃 露灰	24	
	28	25-T9 曲輪・塹	青磁	—	—	—	灰オーブ	灰オーブ	堅版					14C後半～15C中頃 露灰	17	
	29	25-T9 曲輪7	青磁	—	—	—	オリーブ灰	オリーブ灰	堅版	蓮弁文				15C後半～16C中頃 上 田B・IV 線脚	16	
	30	25-T9 曲輪7	青磁	(7.6)	—	—	オリーブ灰	オリーブ灰	堅版					14C後半～15C末 高台内 面施付・施墨者	14	
	31	25-T9 土底 6	青花	(7.9)	—	—	明暦灰	明暦灰	堅版	染付	界線			15C後半以降	25	
	32	25-T9 客土	灰彩	(3.0)	—	—	灰白	灰白	堅版					16C後半～17C前半	28	
	33	25-T9 ・客土客土	胸器	(22.4)	—	—	灰白	灰白	堅版	回転ナデ	回転ナデ	4 少		16C中頃～17C初	1	
	34	25-T9 土底 6	青磁	—	—	—	露灰	露灰	堅版	施釉				釉有	37	
	35	25-T9 曲輪7	瓦	—	—	—	建手灰	建手灰	ナデ	ナデ	2			歎土:精良	3	
	36	25-T9 客土客土	瓦	—	—	—	10V85/3	10V85/4	にじみ青	ナデ	ナデ			歎土:精良	15	
p.19 第15回	38	26-T8 6層	青花	(5.7)	—	—	灰	灰白	良好	裏の墨縁	二重の墨縁	1 微		16C後半～17C前半 足 込み鈍化の目袖割	13	
	39	26-T8 4層・9層	青磁	(9.9)	—	—	灰	灰	良好	片切墨	蓮弁文	1 強		14C後半～15C中頃 上 田B・III	9	
	40	26-T8 客土	青磁	—	—	—	灰黄	灰白	良好	蓮弁文か	なし	0.5 微		青磁か	8	

表4 出土土器・陶磁器観察表(2)

測量項目	番号	道 横 幅 橫	幅 橫	法算 cm ()	復原	色 調	構成	測量・文様				考 号		
								外 面	内 面	A	B			
p. 15 国	41	36~70 46~8~7層	土師器 皿	6.0	灰白 7.5M88/2	灰白 7.5M88/2	良好	回転ナデ	ナデ	2 強		素切刃	11	
p. 20 第 16 国	45	36~70 5~7層	白磁 皿	—	7.2	—	暗灰 N3	暗灰 N3	良好			15 C 後半～16 C 中頃 森 田 E 丸窓の櫻折れ	14	
第 16 国	46	36~70 8~12層	白磁 皿	—	—	明灰灰 5G77/1	明灰灰 5G77/1	良好		0.62 強			18	
	47	36~70	青磁 碗	—	—	灰オリーブ S5/2	オリーブ灰 S5/2	良好	輪形り道 弁文	0.65 強		15 C 後半～16 C 中頃 上 田 B - IV	22	
	48	36~70 8~12層	青花 皿	—	—	灰白 10Y4/1	青灰灰 10Y4/1	良好	十字花文 強	0.62 強		15 C 後半～16 C 後半 小 野 B - I	19	
	49	36~70 過か	青花 皿	(7.30)	—	に5~5.5黄 2.5M6/3	灰灰 10Y4/1	良好	自然釉	回転ナデ	2			17
	50	36~70	土師器 皿	(14)	8.6	3.24	に5~5.5黄 10Y4/1	灰灰 7.5M86/4	良好	ナデ	ナデ	0.3 少	底面:ナデ	16
	51	36~70	土師器 杓	(11.9)	—	—	灰灰 5M86/6	5M86/2	良好	回転ナデ	強	2.5		15
	52	36~70	土師器 皿	(7.6)	—	に5~5.5黄 10Y4/1	灰白 7.5M86/4	良好	回転ナデ	ナデ	2 強	素切	21	
	55	26~70	白磁 堆積土⑤	—	—	灰白 10Y4/1	灰白 10Y4/1	良好	回転ナデ 回転ナデ 施釉	施釉				91
	56	36~70	白磁 堆積土⑤	—	—	灰白 10Y4/1	灰白 10Y4/1	良				14 C 後半～16 C 中頃 備反	46	
	57	36~70	白磁 堆積土⑤	—	—	灰白 N8/0	灰白 N8/0	良好				14 C 後半～16 C 中頃 備反	42	
第 18 国	58	36~70	白磁 堆積土⑤	—	—	灰白 5G77/1	明灰灰 5G77/1	良好	施釉	施釉	0.62 強	15 C 後半～16 C 中頃 森 田 E 丸窓の櫻折れ	27	
	59	36~70	白磁 堆積土⑤	(4.7)	—	黄灰 2.5M6/1	灰灰 10Y4/1	良好	施釉	施釉		15 C 後半以降 染付およ り高め内面-底無	36	
	60	26~70	青磁 堆積土⑤	—	—	オリーブ灰 10Y4/2	オリーブ灰 10Y4/2	良好	無文			14 C 後半～15 C 中頃 上 田 B - IV	87	
	61	26~70	青磁 堆積土⑤	—	—	灰オリーブ灰 2.5M5/2	灰オリーブ灰 2.5M5/2	良好	無文			14 C 後半～15 C 中頃か 上田 B が櫻反り	64	
	62	36~70	青磁 堆積土⑤	—	—	綠灰 7.5M6/1	綠灰 7.5M6/1	良好	無文			14 C 後半～15 C 中頃か 上田 B - 丸か	45	
	63	26~70	青磁 堆積土⑤	—	—	暗灰灰 2.5M5/1	暗灰灰 2.5M5/1	良好				釉有	41	
	64	26~70	青磁 堆積土⑤	—	—	灰オリーブ 5M5/1	灰オリーブ 5M5/1	良好	輪形り道 弁文			15 C 後半～16 C 中頃 上 田 B - IV	39	
	65	26~70	青磁 堆積土⑤	—	—	オリーブ灰 10Y4/2	オリーブ灰 10Y4/2	良好	輪形り道 弁文			15 C 後半～16 C 中頃 上 田 B - IV	56	
	66	36~70	青磁 堆積土⑤	—	—	暗青灰 10Y4/1	暗青灰 10Y4/1	良好	染付			15 C 後半以降	57	
	67	26~70	青磁 堆積土⑤	—	—	青灰 5M5/1	青灰 5M5/1	良好	施釉 施付 2 本輪形	2 本輪形	0.62 強	16 C 清半以前	26	
第 18 国	68	36~70	青磁 堆積土⑤	—	—	灰白 10Y4/1	灰白 10Y4/1	良好	直状文			15 C 後半以降	85	
	69	26~70	青磁 堆積土⑤	—	—	明緑灰 10Y4/1	明緑灰 10Y4/1	良好	口縁部、見込 にみる1箇 世界			15 C 後半～16 C 中頃 縱 灰灰 T4 と同一側付	105	
	70	36~70	青花 堆積土⑥	—	—	明緑灰 7.5M7/1	明緑灰 7.5M7/1	良好	草花文	見込世界		15 C 後半～16 C 中頃 進 子欄	84	
	71	36~70	青花 堆積土⑥	—	—	灰白 10Y4/1	青白 10Y4/1	良好	染付			15 C 後半以降 二次被焼	78	
	72	36~70	青花 堆積土⑥	—	2.55	—	—	良好	染付			15 C 後半～16 C 中頃 基 盤底底	63	
	73	36~70	青花 堆積土⑥	—	5.9	—	暗灰 7.5M5/1	灰 5M5/1	良好	染付			15 C 後半以降 高台盤底	102
	74	36~70	青花 堆積土⑥	(16.1)	9.5	3.2	—	良好	草花文	1段脚子文		15 C 後半～16 C 中頃 縱 灰灰	69	
	75	26~70	玻璃系	—	—	灰 5M5/1	暗灰 5M5/1	良好					58	
	76	26~70	陶器 堆積土⑦+⑧	(約 14.4)	—	灰黄 2.5M6/2	灰黄 2.5M6/2	良好				釉有	65	
	77	26~70	白磁 堆積土⑦	—	—	灰白 5M5/2	灰白 5M5/2	良好				15 C 後半～16 C 中頃 多 割底風化	73	
客 土	78	26~70	陶器 堆積土⑦	—	—	オリーブ灰 5M6/3	オリーブ灰 5M6/3	良好	回転ナデ 施釉	回転ナデ、 施釉、貰入			92	
	79	26~70	陶器 堆積土⑦	天目	—	灰灰 5M4/2	灰灰 5M4/2	良好				釉有	47	
	80	26~70	陶器 客 土	—	—	灰 5M4/1	灰 5M4/1	良好	施釉				77	
	81	26~70	陶器 堆積土⑦	—	—	灰灰 2.5M4/1	灰灰 2.5M4/1	良好	施釉				59	

表5 出土土器・陶磁器観察表(3)

測定番号	種類	種類	法線cm()	復元	色調	外面 内面	地成	測量・文様				実測号	
								外面	内面	A B C	B D E		
p.22 第18回	82	36-70 堆積土②	白磁		灰白 2.5M8/2	灰白 2.5M8/2						67	
	83	36-70 堆積土③	陶器	(3.7)	-	良好 無釉、ス						106	
	84	36-70 堆積土④	瓦質	-	-	灰 5M8/1 SA/	良好 サエ、刀子 ハケ					106	
	85	36-70 堆積土⑤	陶器			灰黄褐 10M8/4/2 2.5M8/4/3	同軸ナデ、 無釉	同軸ナデ、 無釉				103	
	86	36-70 堆積土⑥	瓶			灰褐 7.5M8/4/2 7.5M8/5/2	良好 同軸ナデ、 無釉	同軸ナデ、 無釉				26	
	87	36-70 堆積土⑦	陶器				良好 ハケ ナデ	ハケ ナデ				38	
p.23 第19回	88	36-70 堆積土⑧	陶器		灰青 10M8/4 10M8/5/2	灰黄褐 2.5M8/2	良好					60	
	89	36-70 堆積土⑨	陶器		灰黄 2.5M8/2	灰褐 7.5M8/4/2	良好 無釉	同軸ナデ				88	
	90	36-70 堆積土⑩	陶器				ハケ ナデ	同軸ナデ				62	
	91	36-70 堆積土⑪	陶器	-	-	褐灰 10M8/4/1 3M8/1	褐灰 3M8/1	良好				49	
	92	36-70 堆積土⑫	陶器	-	-	褐灰 5M8/6/1	褐灰 2.5M8/4/2	良好				43	
	93	36-70 堆積土⑬	陶器	-	-	褐灰 7.5M8/4/1 10M8/1	褐灰 7.5M8/5/2	良好 同軸ナデ				81	
p.24 第20回	94	36-70 堆積土⑭	陶器	-	-	灰 10M8/4/1 NA/1	灰 NA/1	良好 同軸ナデ	同軸ナデ 7条の縁目			99	
	95	36-70 堆積土⑮	陶器	-	-	褐灰 10M8/6/1	褐灰 7.5M8/5/1	良好 自然釉	同軸ナデ、 同軸ナデ、 僅りあり			94	
	96	36-70 堆積土⑯	陶器	-	-			同軸ナデ	同軸ナデ			104	
	97	36-70 堆積土⑰	陶器	-	-	12.5M8/4/2 7.5M8/5/3	灰青 2.5M8/5/2	良好 ヨコカ ナデ	シリド カタキ			74	
	98	36-70 堆積土⑱	陶器	23.0	-	灰 7.5M8/4/2 7M8/1	灰 7.5M8/5/2	良好 同軸ナデ	同軸ナデ			98	
	99	36-70 堆積土⑲	土師器	(8.0)	(5.8)	(2.0)	に5M8/4 7.5M8/6/1	良好	同軸ナデ 同軸ナデ	0.5 少	ヘラ切	37	
p.25 第21回	100	36-70 堆積土⑳	土師器	(11.3)	(6.6)	2.8	に5M8/4 7.5M8/6/1 8M8/1	に5M8/4 良好	ナデ ナデ	0.2 中	素切	24	
	101	36-70 堆積土㉑	土師器	(14.0)	(8.0)	2.4	に5M8/4 10M8/4/1	に5M8/4 10M8/7/3	やや 良好	同軸ナデ	2 少	底面: 素切	59
	102	36-70 堆積土㉒	土師器	(11.2)	(6.9)	(2.65)	褐灰 10M8/4/1	褐灰 10M8/7/3	良好	同軸ナデ スヌ付着		ヘラ切り底	25
	103	36-70 堆積土㉓	土師器	7.45	6.15	1.6	に5M8/4 7.5M8/6/4	に5M8/4 良好	やや 良好	同軸ナデ	4 少	ヘラ切	31
	104	36-70 堆積土㉔	土師器	(8.0)	(5.4)	(2.0)	に5M8/4 7.5M8/6/4	に5M8/4 良好	ナデ ナデ			素切り	32
	105	36-70 堆積土㉕	土師器	7.35	4.8	1.8	明褐色 5M8/5/6	褐 良好	同軸ナデ 同軸ナデ	1 少	素切り	33	
p.26 第22回	106	36-70 堆積土㉖	土師器	(6.8)	(4.6)	1.65	灰黄褐 10M8/4/2	灰黄褐 10M8/4/2	やや 良	同軸ナデ 同軸ナデ	0.5 少	素切り	35
	107	36-70 堆積土㉗	土師器	(10.0)	(6.2)	2.6	褐 5M8/6/4	に5M8/4 7.5M8/5/4	良好	同軸ナデ 同軸ナデ	2 少	底面: 素切	53
	108	36-70 堆積土㉘	土師器	(4.4)			褐 7.5M8/6/4	に5M8/4 良好	同軸ナデ 同軸ナデ	2 少	底面: 素切	55	
	109	36-70 堆積土㉙	土師器	7.1	4.6	2.7	灰黄褐 10M8/5/2	に5M8/4 7.5M8/5/2	良好	1 少	1 少	1 少	72
	110	36-70 堆積土㉚	土師器	12.6	7.9	2.4	に5M8/4 10M8/6/3	灰黄褐 10M8/6/3	やや 良	同軸ナデ 同軸ナデ	1 少	底面: 素切	54
	111	36-70 堆積土㉛	土師器	(9.0)			に5M8/4 7.5M8/5/4	に5M8/4 7.5M8/5/4	ナデ ナデ	1 少	0.9 中	底面: 素切	68
p.27 第23回	112	36-70 堆積土㉜	土師器	(12.0)	(7.2)	2.68	に5M8/4 7.5M8/5/4	に5M8/4 7.5M8/5/4	良好	同軸ナデ 同軸ナデ	2 少		70
	113	36-70 堆積土㉝	土師器	(0.1.80)	8.55	2.65	に5M8/4 7.5M8/6/4	に5M8/4 7.5M8/5/3	良好	同軸ナデ スヌ付着	1 少	底面: 素切底	82
	114	36-70 堆積土㉞	土師器	6.7			褐 7.5M8/6/4	に5M8/4 7.5M8/6/4	良好 風化著し <不規	<不規			95
	115	36-70 堆積土㉟	土師器				灰黄褐 10M8/5/2	に5M8/4 10M8/6/3	良好 黒皮	同軸ナデ 同軸ナデ	1 少		97
	116	36-70 堆積土㉛	土製品	2.15	1.1	1.95	に5M8/4 7.5M8/6/4	に5M8/4 7.5M8/5/3	良好				34
	117	36-70 堆積土㉜	その他				に5M8/4 10M8/6/3	7.5M8/4/1				ルブボル	93
p.28 第24回	118	36-70 堆積土㉝	調査				に5M8/4 5M8/5/4	に5M8/4 7.5M8/5/3	良好 頗る黒	ナデ ナデ	4 多	底面: ナデ 曲平式	86
	137	36-70 堆積土㉞	調査								1 多		

表6 出土土器・陶磁器観察表(4)

出範頁 図版頁 号	番 号	道 標	種 別	法盤 cm ()	復元	色 調	外 面 内 面	施成	調 整・文 標				地 考	考 観 号
									A	B	C	D		
p.25 第22回	139	サブトレー	4	-	-	褐色	褐色	褐色	良				16C中葉～17C初	51
	140	サブトレー	4	-	8.0	褐色	に、灰褐色	心や良	凹輪ナデ	凹輪ナデ	3	少	ススベ着底面系切	52
p.25 第23回	141	白磁	黒	3.45	に、灰褐色	灰黄	良好	下半圓滑					14C後半～16C中期、切高台、外面部一部と高台部 鐵鑄	108
	142	白磁	黒	-	-	灰オーブ	灰オーブ	良好	溝刷り 漢文				15C後半～16C中期 上 田B-IV	109
p.25 第23回	143	青花	黒	-	-	灰	灰褐	良好	倭村、施物	口縁部に1箇 施物、施物			15C後半～16C中期 磁 灰黑	110
	144	青花	黒	-	-	灰褐	灰褐	良好	スコ、施 施物突起、ナデ	スコ付器、1 少				107
p.25 第23回	147	青磁	黒	-	-	オーブ	オーブ	良好	内切刷り 漢文				14C後半～15C中期 上 田B-III	112
	148	青花	黒	-	-	明オーブ	明オーブ	良好	施物、口縁部 に一箇施物				15C後半以降	113
p.26 第24回	149	白磁	黒	-	-	繪青灰	繪青灰	良好					施大長3.5、施大幅1.6、 施大束1.3、植わり、耳?	114
	150	A種IV 西側斜面	青磁	(12.0)	-	灰	灰白	良好	内切刷り 漢文		0.61	強	14C後半～15C中期 口 折れ、安樂窯工事立会時	6
	151	A種V 西側斜面	土磁器	(6.1)	-	灰白	に、灰褐色	良好	凹輪ナデ	なで	1.5	強	永昭、安樂窯工事立会時 客土出土	4

表7 出土土製品観察表

高 度 直 角 番 号	國 内 高 度 番 号	高 度 番 号	造構等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 No.
13	11	19	25-TD 曲輪Ⅷ	瓦器類	3.60	2.49	1.79	19.6		2
20	16	53	26-TD 下層埋土	土師	4.40	1.05	1.10	4.5		20
24	20	117	26-TD 埋積土③	土師	3.80	1.30	1.20	5.6		48
		118	26-TD 埋積土②	土師	3.90	1.25	1.10	4.2		49
		119	26-TD 埋積土③	土師	3.65	1.30	1.25	3.9		66
		120	26-TD	土師	5.25	1.75	1.65			71
		121	26-TD 埋積土④	土師	5.20	1.50	1.50	9.7		96
		122	26-TD 容土	土師	3.69	1.15	1.05	3.5		79
25	23	145	26-TD	土師	4.10	1.20	1.05	5.8		80
					(2.70)			3.3		111

() の値は残存値を示す

表8 出土金属製品観察表

高 度 直 角 番 号	國 内 高 度 番 号	高 度 番 号	造構等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 No.
10	8	4	25-TA	鉄鉗	1.00	1.00		3.01	鉗	41
19	15	44	26-TA 4a+b+9層	鉄鉗	1.50		0.30	6.80	2.7g 縦扁に彫れ	99
24	20	130	26-TD 埋積土①	小札	4.70	2.49	0.25	8.40	裏に落灰	1
		131	26-TD 埋積土③	札	3.80			12.36	上面はやべ不規形	3
		132	26-TD 埋積土②	針	2.85	0.55	0.35	3.43	先端トゲ状に欠損	7
		133	26-TD 容土	小柄	6.55	1.40	0.60	22.50	柄：銅 刃：鉄	116
		134	26-TD 埋積土④	鋼松	1.70	1.00	0.50	3.73	材料：緑青	100
		135	26-TD 埋積土①	鈴	2.35	2.35	0.61	2.30	東夷通宝	30
25	23	146	26-TD	針か	(4.80)	0.20	0.20	1.03	全体的に穴吹き跡	101
26	24	152	4a+b+9層	鉄鉗	1.05	1.05		3.66	全体に台化 1号	2

() の値は残存値を示す

表9 出土石製品観察表

高 度 直 角 番 号	國 内 高 度 番 号	高 度 番 号	造構等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 No.
13	11	20	25-TD 曲輪	石臼	17.4	9.1	9.2	1620.0		6
15	12	26	25-TD 曲輪下斜面	砾石	4.5	1.5		37.24	使用痕有	12
16	13	37	25-TD	砾石	2.1	1.9	0.7	4.32		27
19	15	42	26-TA	砾石	1.1	1.4	0.55	1.74		12
20	16	43	26-TA 4a+b+9層	砾石	(3.10)	3.60	0.75	10.42		10
		54	26-TC 容土	砾石	2.03	1.73	0.53	3.09		23
		124	26-TD 埋積土②	砾石	2.3	1.55	0.45	2.7		28
		125	26-TD 埋積土③	砾石	1.60	1.35	0.58	2.1		29
		126	26-TD	砾石	1.9	1.35	0.4	1.7		75
		127	26-TD 埋積土③	砾石	2.2	1.5	0.65	4.1	砂22.9	83
25	21	138	26-TD 埋積土②	石礫	1.75	1.50	0.5	2.7	砾石	44
26	24	153	4a+b+9層	砾	(12.7)	19.65	1.8	289	貝殻貝岩	5

() の値は残存値を示す

第3章 まとめ

今回の調査は主郭（曲輪7・8）における遺構整備に向けて、『史跡 穂佐城跡I』として報告済みの既調査の補足として実施した。

穂佐城の中心的な建物と考えられる曲輪7の奥、西半に位置する大型掘立柱建物と土壘との間の空間においては、枯山水等の庭園の存在を想定して調査をおこなったが、そのような空間が存在していたことを積極的に示すものは検出されなかった（25-7A）。土坑2基について自然科学分析をおこない、枯山水の池の可能性を想定していた大型の1基（土坑2）については、大量の稻藁が含まれていたことがわかり、何らかの実用的な用途を持った土坑であったと考えられる。またトイレ遺構と想定していた土坑（土坑28）については、残念ながら寄生虫卵等の検出には至らなかったが、これは乾湿を繰り返すシラス土壤の性質に負うところが大きい。今後の調査においても、環境条件等を検討し、自然科学分析は積極的に実施していく必要があろう。

曲輪7西端の土壘上においては、柵列等の構築物の有無確認のため2ヶ所の調査区を設定したが、結果として構築物は検出されなかった（25-7B・C）。空堀に面した土壘の際は崩れていますとも想定されることから、当初存在した柵列等の痕跡が今に残っていない可能性も考えられるが、基本的には土壘上に柵等は構築されていなかったと考えてよいかと思われる。

現況3mの比高差を持つ曲輪7と8の間の斜面について、3ヶ所の調査区を設定した（25-7D・E・F）。うち西端の調査区については、曲輪7での前調査において曲輪8へと通じる通路かと想定される溝（溝1）が検出されたため、その確認をおこなったが、この溝は曲輪7際で収束し、斜面・曲輪8へと通じてはいなかった。今回調査において他の斜面中に設けた調査区でも通路は確認されなかつたため、現状では曲輪7と8の連絡は、前調査で検出された斜面中ほどの階段状の遺構と、曲輪7東際を南北に縱断する堀底道との2ヶ所に限定されていたと解釈できる。

3ヶ所の調査区それぞれでの斜面の様相はいずれも地山のシラスを削り出しているが、その傾斜角はそれぞれ40度、50度、60度と一定ではない。シラス土壤の特性を生かした南九州の大型山城では、特に空堀では垂直に近い傾斜を持つものが多いが、堀を介さない曲輪間の段差では、空堀ほどの防御性を意識せず緩やかな傾斜とした場合もあるのであろう。

主郭である曲輪7南東端の出入口部（虎口）については、前調査において可能性を指摘したことであるが、鍵の手に折れ曲がるL字形の構造ではなく、突き当りから左右双方に通路が伸びるT字形の構造を持つことが確定した（26-7A）。うち、北方に伸びる通路は堀底道として曲輪7から同じく主郭と評価される曲輪8へと抜けることはこれまでの調査で確認できている（通路①）、南方に伸びる通路がそのまま曲輪7の南に隣接する曲輪9へと通じるのか、曲輪9の位置付けもあわせて今後明らかにしていかなければならない。またT字形の出入口については、県内では中世伊東本宗家の本拠である西都市都於郡城の奥ノ城に見られるが、他に鹿児島県南九州市知覧城、同鹿児島市苦辛城、同串木野市串木野城などにもあり（南九州城郭談話会諸氏教示）、南九州に広く分布するようである。その初現や構築主体等、今後の南九州における城郭研究の中で重視しなければいけない問題であろう。

この北方に伸びる堀底道（東端堀・通路①）については、4ヶ所の調査区で東側の肩口を検出し（26-7B・C・E・F）、前調査の成果とあわせてその規模は上端幅3.5m（26-7Cでは4.3m）、底面幅1.8m、深2.6mを測る。

この堀底道が曲輪7と連絡する地点である曲輪7の北東端においては一部堀の底面まで掘り下げをおこなった（26-7D）。検出面から底面までの深は2.5mで、東側の立ち上がりの角度は垂直に近い。また底面は地山であるシラス土をそのまま使用面とするのではなく、細かく丁寧な造成によって通路面を構築していることが確認できた。土層の検討では複数回水が流れたような痕跡も確認できたことから、必然的に曲輪面からの雨水等が流れ込むことになる堀底道について、水に弱いシラス土そのままでは使用に耐えなかつたためと考えられる。

この地点における土層の堆積は、その様相から大きく4つの時期に分かれ、上から近世以降の耕作等にともなう土、廃城時の埋め土、出入口とこれに連絡する通路の作り替えにともなう造成土、当初構築時の底面形成のための造成土と解釈できる。うち最も下位の造成土中から出土した陶磁類の年代観を積極的に評価すると、この堀底道（およびこれが連絡する曲輪7南東端のT字形出入口部）が構築された時期は16世紀初頭から16世紀中頃に比定される可能性が高い。史料に見る穆佐城の歴史では、この間、1540年に穆佐城主長倉上総介が弟である長嶺地頭長倉能登守とともに伊東義祐に対して反乱を起こし鎮圧されるという事件が起きている（長倉能登守の乱）。この反乱は飫肥の島津豊州家の援軍も得ての大規模なものであったため、上総介がその居城である穆佐城において戦闘に向けての大規模な改修をしていたとしても不思議はない。主郭内における深さ2.5mの大規模な出入口とこれにともなう堀底道という過度に防護を意識した導線はあるいはこの長倉上総介の時代に構築されたものとも考えられる。

穆佐城跡では平成15年度から整備にともなう調査を開始し、今日現在も継続して実施している。現状では南九州の城郭の中で、最も長期間、継続的に発掘調査を実施している城跡となっており、南九州のみならず、全国的な視点での城郭の調査・研究においても果たすべき責は大きくなりつつある。これは整備の観点から見ても同様であり、これまでの調査成果を踏まえ、今後主郭（曲輪7・8）での遺構整備について慎重に検討をおこなっていただきたい。



①



②



③



④



⑤

①25-7A(南東から)、②25-7A 土坑28(手前)と土坑2(奥)(西から)

③25-7B(南から)、④25-7D(北東から)、⑤25-7D 曲輪7部分(東から)



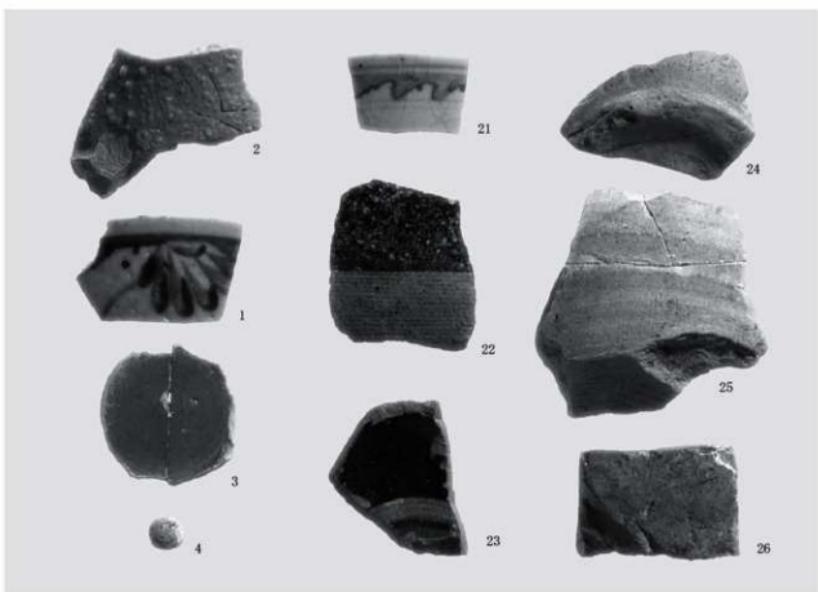
⑥25-7D・E・F(北西から)、⑦25-7E(北西から)、⑧25-7F(北西から)

⑨25-7F 曲輪7部分(東から)、⑩25-7F 曲輪8部分(東から)

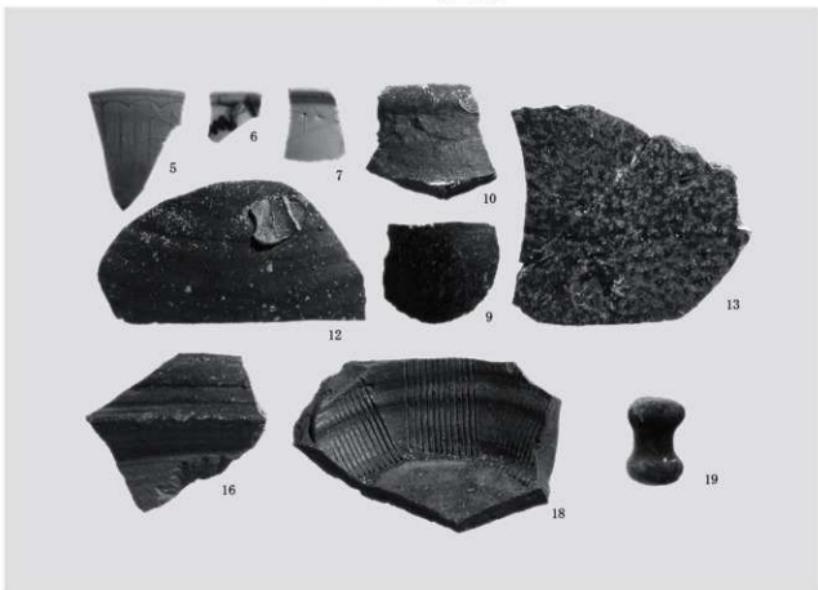


⑪26-7D (南から)、⑫26-7D (北から)、⑬26-7A (北西から)

⑭26-7D 堆積土4掘り下げ状況(北から)、⑮26-7E・F (北西から)



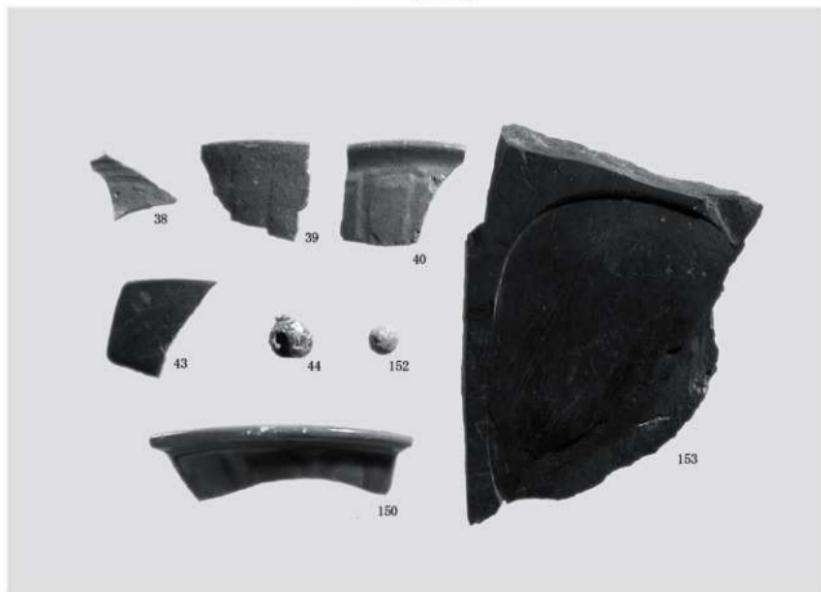
25-7A·25-7E 出土遗物



25-7D 出土遗物



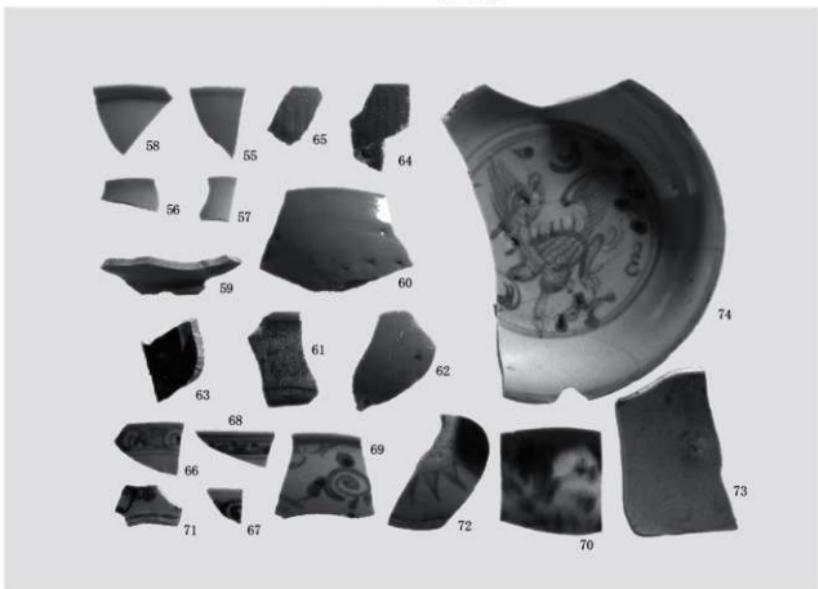
25-7 F 出土遺物



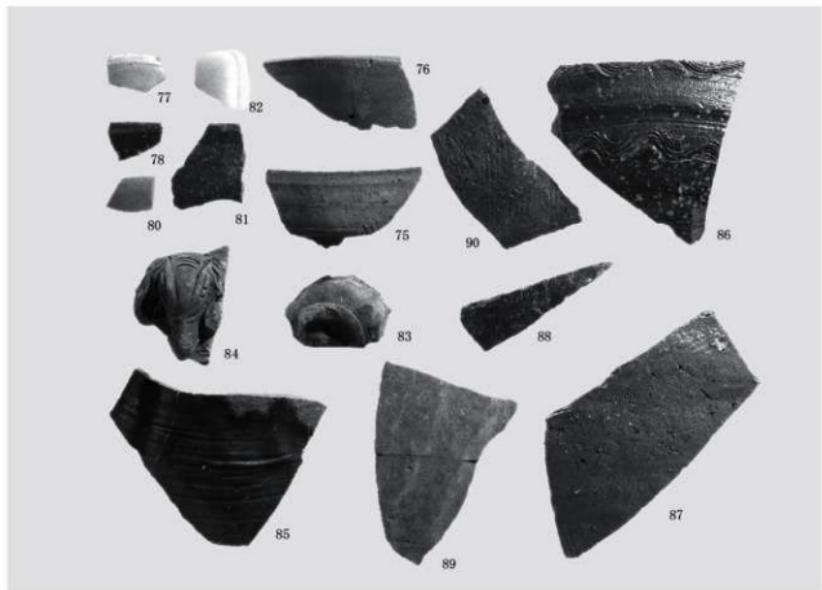
26-7 A・その他の出土遺物



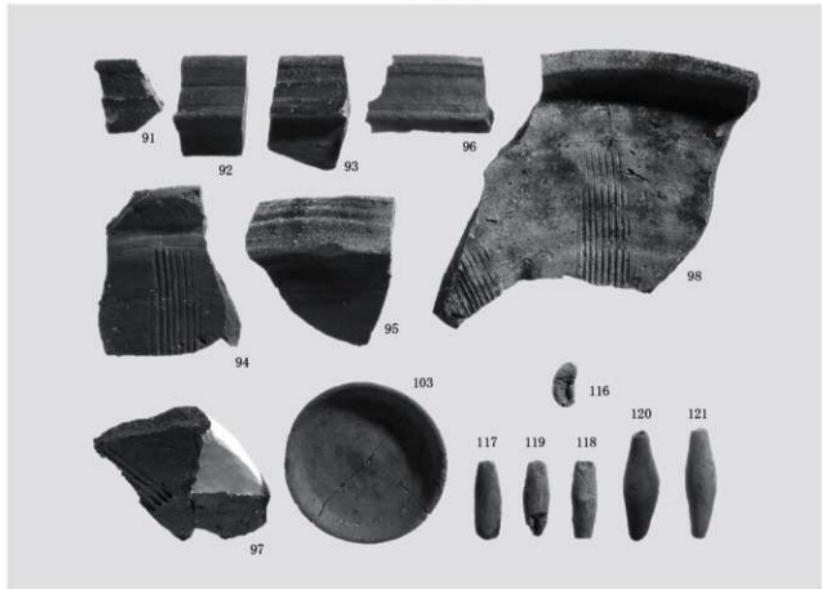
26-7B·26-7C 出土遗物



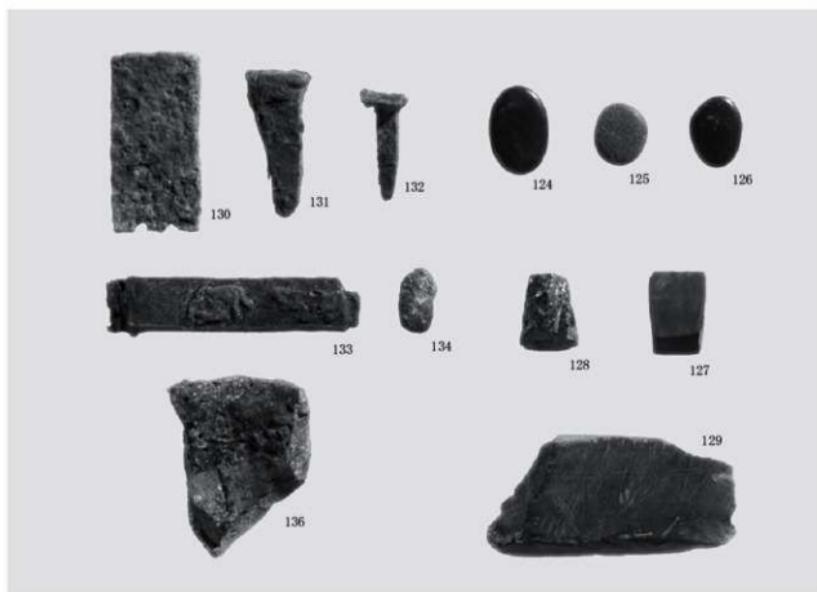
26-7D 出土遗物①



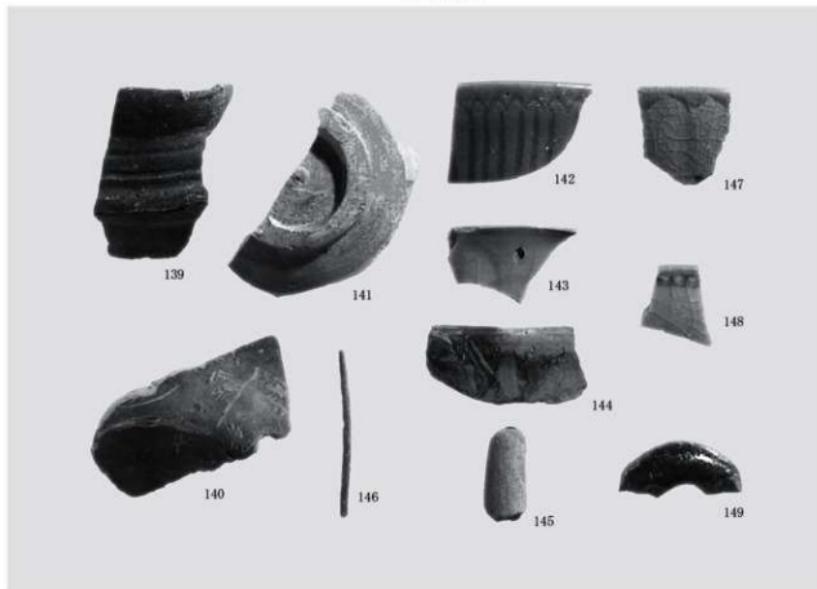
26-7D 出土遺物②



26-7D 出土遺物③



26-7D 出土遺物④



サブトレ4・26-7E・26-7F 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しせき むかさじょうあと II						
書名	史跡 穂佐城跡 II						
副書名	穆佐城跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第114集						
編集者名	竹中 克繁						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎市橋通東1丁目14番20号						
発行年月日	2016年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
穆佐城跡	宮崎県 宮崎市 高岡町 小山田	45201	33-011	31° 56' 00" 付 近	131° 19' 25" 付 近	2013.10.1 ‐ 2014.1.31 ‐ 2014.12.2 ‐ 2015.3.14	266.2 m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
史跡整備	城館	中世	堀・土塁・切岸・土坑・ 通路遺構 等		輸入陶磁・国 産陶器・土 師器・金屬 製品 等	主郭（曲輪7・8）の遺 構整備に向けて、既調 査（『穆佐城跡 I』と して報告済み）の補足 調査として実施	

宮崎市文化財調査報告書 第114集

史跡 穂佐城跡 II

穂佐城跡保存整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年3月

発行 宮崎市教育委員会